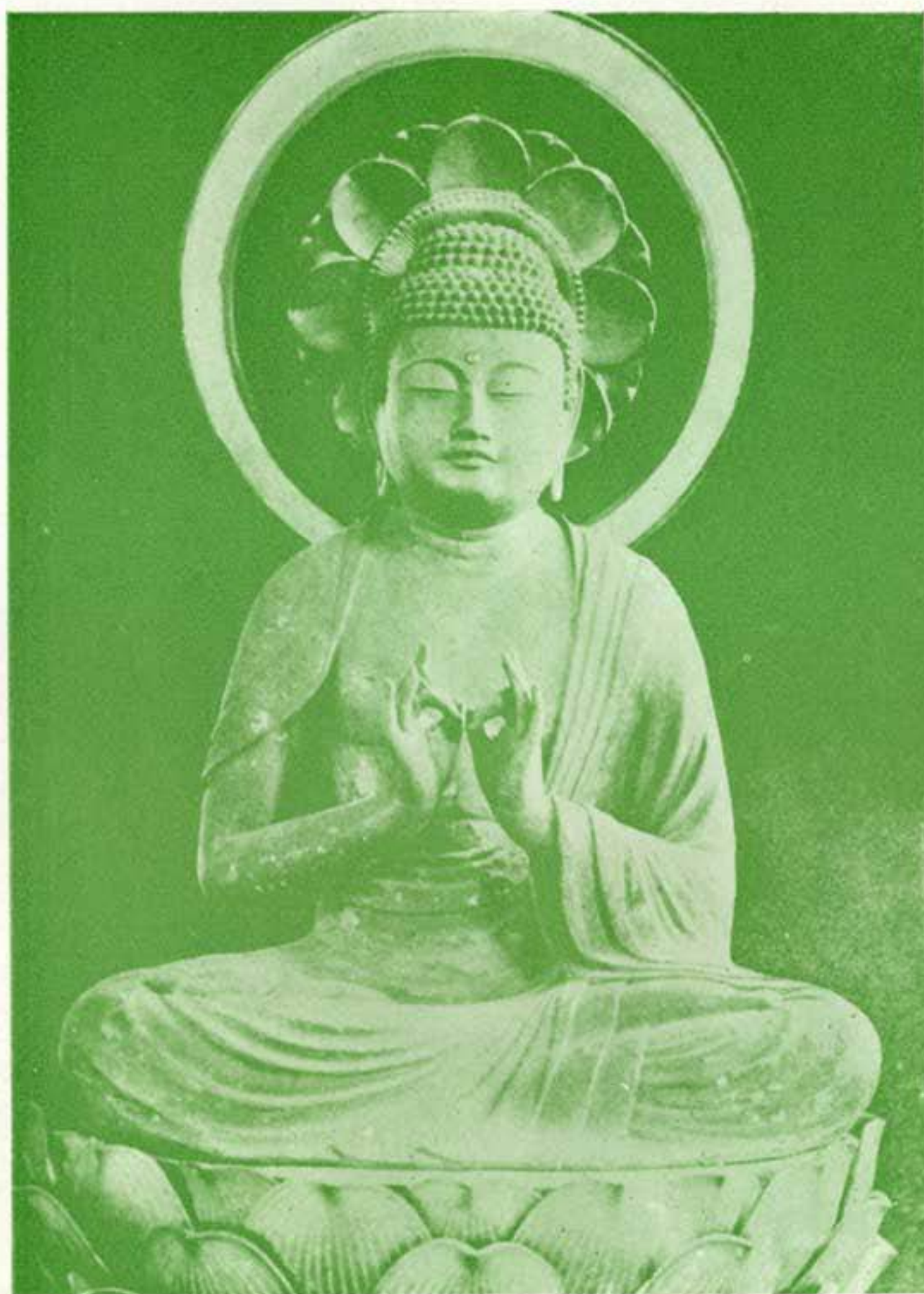


浄土

九月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授承認第三五二号)
昭和三十六年八月二十五日 印刷 昭和三十六年九月一日発行

第二十七卷

第八号

最新刊 浄土トラクト

村瀬秀雄著

月影抄

御法語の栞り

本誌「扉の御法語」として毎月執筆中のなかから著者が七篇を選んで解説を付して新らたに浄土トラクトの一編として刊行

目次

- 一、上人のご日常（われ聖教を見ざる日なし）
- 二、浄土宗の意義（われ浄土宗をたつる心は）
- 三、道を求む（かくの如くして昨日もいたづらに暮れぬ）
- 四、決定の信（我は鳥帽子もきぬ法然房也）
- 五、弥陀名号の功德（無礙光とは）
- 六、信仰のすがた（つみは十悪五逆のものも）
- 七、念仏を勧める（不軽大士の杖木瓦石を）
- 八、あとがき

東京都千代田区飯田町二ノ八

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

B 6 版	十六頁
定価	十五円
送料	十円
二十部以上五分引	
五十部以上一割引	
百部以上二・五割引	

浄土の会員を一人でも多く

- ◆どなたでも会員になれます。
- ◆会費は年額六〇〇円です。
- ◆会員には毎月浄土を配布します。
- ◆この会は皆様の会ですからその発展の為に
お一人でも多くの会員をつくって、正しい
信仰運動をひろめましょう。
- ◆お知合の方にぜひおすすめ下さい。
- ◆お申込は振替（東京八二一八七番）を御利
用下さい。

東京都千代田区飯田町二の八

法然上人鑽仰会

浄土

九月号



写真は中央アジア・ローランの古代墓地から発見された絹織物の紋様（漢字が織り込まれている）

阿弥陀仏の本願は、名号をもて罪惡の衆生をみちびかんとちかひ給たれば、ただ一向に念仏だにも申せば仏の来迎は法爾の道理にてうたがひなし。（つねに仰られる御訓、勅修御伝第二十

一）
法然上人御法語

浄土 九月号 目次

表紙……重要文化財阿弥陀如来像

青年仏教徒の使命……………恵谷隆戒…(三)

第十八願文は作り事か……………小沢勇貫…(三〇)

月と兎……………石上善応…(三三)

お彼岸のいわれ……………山下八古…(三三)

小説はおすき市……………一瀬直行…(六六)

彼岸 天地自然の恩恵……………中野隆元…(六六)

布教 煩惱をみつめる……………平林宥高…(八〇)

童話 いじわる村長さん……………みなくちまさひろ…(三四)

近代高僧伝 杉山大運……………大橋俊雄…(二八)

実話 最後の演芸会……………吉野翠幹…(三〇)

桐一葉……………布施の功德……………(二五)

智慧の簪……………まことの団体……………(八)

人の世の姿……………表紙の写真……………(三五)

和楽の国……………扉の御法語……………(五)

ゴネ得精神……………会員だより……………(三五)

聖典 念仏にすけささぬ……………竹中信常…(三六)

講義 あとがき……………(四二)



青年仏教徒の使命

仏教大学長

恵谷隆戒

静かに今日この頃の世相をながめて見ると、昨年の安保闘争と云い、今年の政暴法反対闘争と云い、近頃しきりに青年学徒や、青年労働者のデモが盛りあがり、左翼的な運動が活潑に展開されて来たかと思うと、その反対に、右翼青年のテロ行為がやたらにはげしくなってきた感じがする。

もちろん、彼等青年の運動には、それさうとうの理由があることはよくわかるが、あまりにも無軌道的であるのには驚かざるを得ない。こうなってきたと、日本の将来は一体どうなっていくのであろうかと、眉をひそめざるを得ないような気がするの、あえて私一人だけでもあるまい。

また近頃、バスや電車に乗れば、青年学徒が大股をひろげて、ところせましとまでに座席を占領し、老人や婦女子に席をゆずろうともしない。しかも彼等は、赤シャツを着、異様な服装をして気随気ままの行動をなし、他人に迷惑をかけては相いすまぬ、申しわけがないなどと云う、道

義的な観念はどこえやら失なわれてしまって、全くでたらの行動をしているのが目にとまる。一体これでよいのであろうか、これで文化国家の国民と云えるのであろうか、と云うことが念頭に浮んでくるのは、あえて私一人だけの感想でもあるまい。

また近頃、大都市の公園や遊園地などを、夜分に散策してみると、至るところで青年男女が奇怪なたわむれをしている姿が目にとまる。思わず顔をそむけて通らねばならぬことがしばしばである。一体これはどうしたことであろうか。自由を尊重しなければならぬと云うことはよくわかるが、自由の限界を超えて、本能まる出しの行為をしているような気がしてならない。果して野獣的な行動の現れだとすれば、ゆゆしき大問題であって、速かに対策を考え、善導することが、今日急を要する問題ではないかと考えるのは、あえて私一人だけでもあるまい。

またそれぞれの職場にたはらく労働者や公務員を初め、学校の先生までも組合運動に熱狂し、ストライキを唯一の武器であるかの如く考えて、一もストライキ、二もストライキとやるのは如何のものであろうか。組合運動の必要性はよくわかるけれども、いたずらに、己の権利のみを強調

智慧の箒

釈尊が托鉢を終って帰ると祇園精舎の門のところで、お弟子のチューラパンタが独り泣いていた。釈尊が優しく質ねると、彼は「私は生れつきの愚もので、三年になっても聖訓一つ暗誦できません。修行をあきらめて故郷に帰ろうかと思ひます」と答えた。

釈尊は彼に一本の箒を与えて「この箒で精舎をはき清めよ。そして塵を去り垢を除くと誦えよ」と訓された。

彼はそれから毎日庭を掃き清めるのに余念がなかった。そしてある日、彼は「塵とは心の

塵、垢とは心の垢、修行とは心の塵と垢との迷いを除くことである」と悟った。そして釈尊に向って、

「世尊よ、私は以後、智慧の箒で心の塵を除きます」と申上げた。

たとえ聖教をいかに暗誦してもそれを実際に行わなかったならば牧童が他人の牛を数えながら暮しているのと同じことで、一頭も自分のものにならず、その者は修道者たるの資格がない。

聖教を暗誦することが僅かでも行うことが正しければ、修道者たるの資格は十分である。

して一步もゆずらないところに問題があるのではなからうか。凡そ権利には必ず義務が伴っているものでなければならぬ筈であるのに、義務の履行を棚あげし、職場を放棄して運動に狂奔する姿は、考えさせられる幾多の問題があるように思われるのは、あえて私一人だけがかく考えるばかりでもあるまい。

かように現代の世相をながめて見るとき、種々雑多の姿が眼にとまり、頭に浮んでくるのであるが、これは要するに、政治の貧困、経済の不安、教育の欠陥、宗教心の欠如から起り来った現象ではなからうか。ことに宗教心の欠如は、戦後派の青年において最も甚しさを増している感がある。現代の青年は、宗教を阿片なりと考え、骨董視するところに根本的なあやまりがある。真の宗教は、かくの如きものではなくて、人生に生きがいを感じ、香り高い人格を形成し、人間生活にうるおいを与えるものであり、安らぎを得た生活を楽しませるものでなければならぬ。宗教をいたずらに非現実的・非科学的なものと考え、ことそれ自身が、宗教を知らざる者のする仕業であって、現代青年の三思三省を要するところであらう。

現代の科学者は、科学万能を強調して、宗教を否定せんとするところに、科学者の本末顛倒があり、宗教者は、精

神生活のみを強調して、物質科学をないがしろにせんとするところに、宗教者の本末顛倒があるのではなからうか。科学と宗教、物質と精神は、元来もちつもたれつ、たすけあいの関係にあるものであつて、切り離すことの出来ないものである。しかるに、その何れかの一方に偏しようとするから、不具な人間を作り出すことにもなるのであつて、今日見るが如き種々の問題も、これに起因するものであらう。

仏教は、宗教と科学の一如を説き、精神と物質の不二一体を強調するのであつて、一方に偏したものの見方、考え方をすること、徹底的に排撃せんとするものである。仏教が一切皆空を説き、中道実相を力説する所以は、実にこの点に立脚するからである。一切皆空とか、中道実相とか云う言葉は、万物万象の根本法則、万物万象の根本道理を指し示した言葉であつて、これを専門用語で云えば、縁起法と名づけるのである。縁起法とは、万物万象は、悉く一つ基から作り出され、独りあるにあらずして、もちつもたれつ、たすけあいの調和を保つために、つねにうつりかわりの運動を展開しているものであるとするのであつて、この大自然の法則、宇宙の真理にめざめ、その法則、その道理に従つてゆくとき、初めて人間生活を正しうし、安らいを得た人生を楽しみ、生きがいを感じた生活を完うするこ

とが出来ると説いたのが釈尊であり、仏教である。従つて仏教は、科学者の本末顛倒をも正しきに導くものであり、思想家の一边倒をも是正するものでなければならぬ。

こうした仏教の根本義に立脚して、現代の世相をながめて見るとき、あまりにも一方に偏したものの見方、考え方をし、しかもそれにとらわれて、そのみが正見であるかの如く考えているところに、根本的な誤りがあることに気がつかずにいるのであつて、そうした本末顛倒の考え方が、今日の青年をしてあやまたしめる最大の要因をなすものである。万物万象が、独りにあらずして、常にもちつもたれつ、たすけあいの調和を保つべく、うつりかわりの運動を展開しているかぎり、人間といえども、もちつもたれつ、たすけあいの調和を保つべく、新陳代謝の運動をつづけ、改善進歩向上発展してゆくのてなければ、万物万象の根本道理に従つて生活しているとは云えないであらう。現代の青年は、すべからく、こうした仏教の根本義にめざめて、左翼に偏せず、右翼に妥協せず、況んや資本家にも労働者にもおもねず、常に人間としての正しきあり方を直視し、万物万象の根本道理に従つて、己を正しうすると共に人を正しきに導くことこそ、青年仏教徒の使命でなければならぬ。

扉の御法語

法爾の道理と云う事あり。ほのほは空にのほり、水はくだりさまにながる。菓子の中に、すき物ありあまき物あり。これらはみな法爾の道理なり。阿弥陀仏の本願は、名号をもて罪惡の衆生をみちびかんとちかひ給たれば、ただ一向に念仏だにも申せば仏の來迎は法爾の道理にてうたがひなし。

世の中には法爾(ほうに)の道理ということがあります。炎は天に向ってたちのほり、水は低きを流れてゆきます。自明の理というべきことですが、それと同時にこの道理に逆らうことはできません。またお菓子の中にはすいもの、甘いもの等いろいろの味があるのも、お菓子を口にする方の側に好みがあつて、ある人は辛いものを好み、ある人は甘いものを好むからです。従つてお菓子の味にいくつもの味があることが、お菓子たるいわれであつて、かくなければお菓子とはいえませんが、こうしたことを法爾の道理といいます。

法爾とは法(もの)のことわり(そのもの)とい

うことで、自明の理のうちでも最も基となることを指しています。このことを上人は炎、水、お菓子の例をあげて申されました。

さて衆生は十惡五逆の集まりであります。

惡を遠ざけ善に近づくように日目の一切について注意をしているのですが、實際生活ではそれができません。上人の御詞に「人の命は食事の時、むせて死する事も有なり。南無阿弥陀仏とかみて、南無阿弥陀仏とのみ入るべきなり」と教えられても、いざ食事の時になると、もっと気のきいた副食はないのかと思つたり、氣に入れば入るで、ガツガツ喰べてしまします。また上人の御詞に「一丈の堀をこえんと思わん人は、一丈五尺をこえんとはげむべし」と教えられても、一つ仕事をするのもっと楽な仕事をと希い、もっと効果があがり、もっと利益を得ることばかりを欲します。そして少しばかり勉強したり、少しばかり他人のために働くと、すぐ心にゆるみとごりが出てくるのを止めようがありません。

阿弥陀さまは、こうした人々を導き救うために、お念仏を申す人を必ず救うと誓われたのです。「ただ一向に」お念仏さえ申せば、

仏さまが救つて下さる、このことは法爾の道理ともいうべきことであつて、疑いのないことであります。

上人はこのように誰かれとなく常日頃申されていました。この御詞に接すると、上人が慈愛をもつてわれわれを優しくだいて下さるような、上人のあたたかさを感じます。

われわれが反省し、努力すると、それと同時に自分の無力さ罪深さを知つて懺悔をします。こうした悩みは、同じ悩みを最も深刻に體驗された上人にお逢いしてこそ、初めて救いの道が開けてくるのです。上人の御詞は号令でもなく、威圧する如きものでありません。上人にとっては、反省の生活をおくる者たちが可愛くて、何がなんでも仏さまの本願を教えずにはいられないのです。そして親が子供に教えるように、けつして叱りはしません。哲理を説いて、それ故等といったけだかとなつたり、努力が足りぬと難行を強いることは全くありません。雨が天から降り、木が空にそびえるように、お念仏を申せば疑いなし往生できる。これは自明のことなのだとして上人はいわれます。

彼岸会に想う

天地自然の恩恵

中野隆元

お彼岸となれば、吹く風も爽やかに身にしみ、空も深々と澄みわたり日の光も柔かくなります。従って人の心も落着いて、しみじみと物思う頃となり、燈火親しむ秋、冥想の秋ということになります。

昔から春は花、秋は月といい、秋の代表的風物は月で、秋の月はすがしく、清く澄み渡って眺められます。「月の庭身ほそく歩く女かな」と、何となく弱々しく痛々しい感じがします。

これは桐一葉落ちて天下の秋を知るで、万物凋落の自然界の有様が、夏中に弛緩していた身体が、ようやく緊張し、それが人の心に影響するからであります。「春笑い、夏は浮かれて、秋沈み、冬はふるえて暮す一とせ」といわれますが、春夏秋冬の変化があつて、

季節のけじめのある所に住んでいることを幸せと存じます。四季の中でも、人心の澄みきる秋は一層尊いもので、かくてこそ修養の秋、反省の秋、信仰の秋といわれるゆえんがあります。この清澄な秋に、静かに自分を考え直してみることは、まことに時を得たことであります。

また秋は作物の取り入れの時季でもあります。中でもお米は私たちの主要食であります。職業や労力はお米を買い、もしくは作るために使われるので、これは間接的ですが、食べものはお米であり、直接的なものです。お米は農家を作るにしても、お米自体の活力がなければお米はとれません。即ち種が蒔かれ、成長と成熟があるわけで、お米自体に成長し成熟する力がなければなりません。人の

力はそれを最も良好の状態におく助縁の力をなすものです。お米を食べ、お米によって生命を支えている私どもは、米自体の力と天地自然の恩恵を食べ、それによって生きていることになります。

お米ばかりでなく、蔬菜にしても、魚や肉にしても同じく天地自然の恩恵を食しているのであります。衣にあつても住にあつても同じであります。綿布も毛織も、また木材もセメントも硝子も、すべて天地自然の賜物に外なりません。

次に人間の労力にしても、労力の源泉は栄養であり、食物をとることによって生じるものであります。鍛錬の大切なことは当然ですが、これまた十分な栄養なしにあり得ることではありません。

私たちのこの身体は両親から生れたものであるけれど、この姿は祖先たちの身体を通して天地自然が生命を与えて下さったから、ここにがあるので、即ち宇宙生命の分化であると考えるのであります。一臼の餅から小餅をとるように、親から子供が細分されるのであります。こうしてみると人間の身体も生命も

天地自然の賜物であります。これは結局、人間は肉体的にも、精神的にも、自分が生きていくということは、大きな天地自然によって生かされている姿であります。

ここで問題となるのは、天災地異、病災であります。私はこれを天地自然の誠めであると考えています。天地自然の恩恵によって生きていることが解っていても、時には単に感ずるだけで、これに対する報恩の念が薄くなることがあります。天災地異、病災にあって、それらの力がいかに大きく、また私どもの生命を直接支配していることに気がつき私はこれらを誠めだと理解します。このように誠めと信じて敬虔な心を以て天地自然に対するとき、天地は倍に明るく、希望が湧然と沸き立ってくるのであります。

彼岸会布教

しかし天変地異、病災は誠めであるといっても、避け得られる災害も多くあります。これは極力避けねばなりません。もし避け得られるものを避けずに被害を受けたならば、それは私どもの怠慢に対する天地自然の誠めであります。もし人智未だ及ばずして避け得

られないなら、人間の無智に対する誠めであります。

さて、これまで私が天地自然の力と申し上げてきましたが、このことは宇宙精神といってもよく、または宇宙生命という言葉でいいあらわしてもよいと思います。この天地宇宙にみなぎっている大きな力、または精神、または生命は、それがそのまま仏さまであると思うのであります。

釈尊は八十歳にして入滅されました。しかし釈尊の偉大さは、後の者にとって、どうしても僅か八十年の生涯で入滅されてしまったとは思いきれなかったのです。ここで後世にいわれる通り、釈尊は実は悠久の過去から、永遠の未来にわたり、現在もまたいますのであるという信仰が生まれました。釈尊をしたう者の自然な人情ともいうべきで、こう考えるようになって、久遠実成の釈迦牟尼仏が説かれるようになりました。また更に進んで宇宙精神の崇高妙用が仏さまであると信仰されることになり、大日如来の信仰となりました。これと同じようにして、天地自然の力、この恩恵から衆生済度の阿弥陀さまの真身こそ、

この力を持っておられると信仰することができます。観経には阿弥陀さまに八万四千の相があると説かれています。この文も亦、天地自然の森羅万象の相をいいあらわしたものと拝することができます。更にこれらの一々の相に八万四千の随形好があると説かれています。この万象の妙用がこう説かれたと思うのであります。また一々の好に八万四千の光明があると説かれているのは、衆生の蒙る無量の恩恵をさしていると思うのであります。この無量の恩恵に浴してまさしく衆生は救われていたのであります。

このような無量の恩恵に感激し、また感謝しながら明るく生活してゆくところに、光明に照らされた姿があります。何時でも、どこでも、宇宙に遍満しているのが阿弥陀さまの光明であり、常に大恩恵を与え給うておられるのであります。この大慈悲にめざめて感激の生活を送るのが本当の人間の姿であります。従って阿弥陀さまは大願業力をもって、私ども衆生を浄土に摂取し給うています。今現にその大願業力の無限の慈悲を以て、私ども人間を摂取しつつあられます。

苦楽両面の人生

煩惱をみつめる

平 林 宥 高

暑い寒いも彼岸までと申しますが、今年も秋のお彼岸がやってきます。お彼岸の一週間は、自分の仕事に追われて忙しい日をおくっている私たちが、お互いの父母、祖先の恩をしのんで、心から感謝報恩の日送りをするとともに、自分の来し方行く末を静かに考え、生活の反省をする時であります。「今日彼岸、菩提の種を蒔く日かな」とは、この間の消息を詠んだものと思います。

私は何時も「君はお臍をもっているだろうね」と聞きますと、変な顔をします。次に「では一度でもそのお臍を見つめたことがあるか」と尋ねますと「臍など見ませんよ」と答えます。「では今晚寝る前によく臍を見なさい」と申しています。お母さんのお腹の中にいた時に、一番重要な役目をしてくれたの

は、他ならぬ一番ひまそうなお臍なのです。ですから、臍があるということは親があるということです。まことにもったいない存在であります。「何時までもあると思うな親と金」といいます。自分が親となって想い起すのは、親のなつかしきで、「魂だなの奥なつかしや親の顔」という至情の発露ともなっております。

一体彼岸という言葉は、仏教から出た言葉で波羅蜜多という原語から出ております。これを訳しますと「彼岸に至る」となります。この岸から彼岸の岸に渡るのが彼岸であります。これを意識しますと、生死の苦海すなわち、迷えるこの岸から、理想の岸すなわち悟りの岸へ渡るということであります。目覚めた人すなわち仏になるということになりま

まことの団体

ある時、世尊はこう説かれた。

幾千万の人が住んでいても、互に知りあうことがなければ社会ではない。社会とは、そこにまことの智慧が輝いて、互に知り合い信じあつて、和合する団体のことである。和合が社会や団体の生命であり、また真の意味である。

しかし世の中には三通りの団体がある。一つは、権力や財力の備った頭があるために集った団体、二つは、ただ都合のために集ったがい争うことだけを知っている団体、三つは、教えを中心として和合を生命とする団体である。

もとよりこの三種の団体のうち、まことの団体は第三の団体であつて、この団体は、一つの心を心として生活し、その中からいろいろの功德を生んでくるから、そこには平和があり、喜びがあり、満足があり、幸福がある。そして、ちようど山に降った雨が流れて、谷川となり、小川となり、次第に大河となつて、ついに大海に入るように、いろいろの境

す。なぜこの社会が生死の苦海かというところ、我々の現実の生活は、四苦八苦という生きる苦しみ、老いゆく苦しみ、病におかされる苦しみ、死ぬ苦しみ、最愛の父母や子供と別れなければならぬ苦しみ、一生かかってきずかれた名誉や財産とも場合によって別れなければならぬ苦しみがあります。また嫌な相手とも一諸に生活しなければならぬ苦しみ、求めても得られないことの多い社会であります。

そこでこれらの世界を超えて、理想の世界である彼岸に渡るにはどうしたらよいか。お釈迦さまは、これに六つの方法をお示し下さいました。これは世を渡る生活基準とも申すべきものです。その第一は布施であります。

菩薩が大慈心を起して一切衆生を救済することとあります。布施には財施と法施とがあり、物を施して人々を救うことが財施であり、慈悲の心を起して、民衆の安定、教育の進展、国家社会の発展に寄与するのが法施であります。第二は戒であります。人が社会生活をする上に必ず守らねばならない規律であり

ます。親しい間にも礼儀ありと申しますが、親子の間でも、兄弟の間でも、ついこの節度がなくなつて、いつか相反もくすることがあります。これは人として規律を越えた結果の出来事です。第三には忍耐であります。凡そ私たちが社会生活を営んでゆくには、克己がかんじんでございます。何事にも耐え忍んでゆくには必ず苦痛の伴うもので、これを忍ばねば、ことは成就いたしません。人それぞれの希望がありますが、これをなしとげるには、何事も諸事控え目にして、目的を達するまでは苦しくても我慢しなくては、ものことは成就しないのであります。遺教経に「忍の徳たるや持戒の苦行も尚及ばず」と説かれています。

第四には精進であります。精進とは、うまず、たゆまずよく努めることとあります。進むには勇気が必要であります。慎むにしても自信と自重心がなくては出来ません。第五には定であります。これは精神の統一をすることです。我々凡夫の心は常に散乱しがちであります。夫婦の間、親子の間、社会生活の面でも、もう一度静かに考えてことを処理すれ

遇の人々も、同じ教えの雨に潤されて、次第に一つに流れあい、同一味のさとり的大海へと流れ込むのである。それゆえに、すべての心が水と乳のように和合して、そこに美しい団体が生れ出る。

それゆえに正しい教えは、実にこの地上に美しいまことの団体を作り出す根本の力であつて、それは前にいうように、たがいに見出す光であるとともに、また地均しの車が地上の凹凸を平らにするように、人々の心の凹凸を平らにして、和合せしめる力でもある。

このまことの団体は、このように教えを根本の力とするから、教団といい得る。そしてすべての人は、みなその心をこの教えによつて養わねばならぬから、教団は理としては、地上のあらゆる人間を含むが、事実としては同信の人たちの団体である。

この事実としての団体は、教えを説いて施すものと、これに対し衣食を施すものと、両者相まつて、教団を維持し、拡張し、教えの久しく伝わるようにつとめねばならぬ。

それで、教団は和合を旨とし、その教団の使命をはたしとげるように、心掛けねばなら

彼岸会布教

彼岸会布教

ば、円満に話し合えるのに、つい感情にはしつて、とり返しのつかない不幸な結果を招くことが往々あります。「動中に静あり、静中に動あり」と申します。この言葉はなにことも心を落ち着けて実行すべきだとの意であると思います。

第六には智慧であります。仏教の真理を悟るには正しい智慧が必要です。この正しい智慧がなければ、前の五つがふみ行われても、彼岸へ渡ることができません。仏法の大海は「信をもって能入とす。智をもって能度とす」とお経にあります。これはたとえ信心があつても、仏法に帰依しても、悟りの彼岸に至るには正しい智慧の力によらねばならぬことを意味しています。私たちは物の差別の一面のみを見て善悪を判断しがちでありますから、やがては他人を排して自分だけが良いんだという妄断を下し易いのであります。苦しい反面だけを見るものは、もっぱら悲観にのみ陥り、楽しい一面だけを見るものは樂觀に陥ち入り易いのであります。苦楽両面の人生を見通すことは、これではできないのであります。

「老らくのこんと知りせばかどとちて、なしとこたえてあらざらましを」という歌が古今集にあります。何時までも若くありたいのは人情ですが、そうはゆきません。自分に良い面だけを見ていると、何かにつけて、変にぶち当たった時に、その変に処することが絶対できないのであります。また「よびませる、みこえにあれど、聞えぬは、迷いの雲の深かればなり」と古歌にあります。私は常に私どもに、早く正しい人間としての道を求めるようにと申されているが、聴く私どもの方が、いかにも身のまわりの欲望にふみまよっている、仏のお言葉を聞くことができないのであります。

むかし、中国の徽宗皇帝という人が、揚子江の南にある金山寺にいたとき、住持の黄伯禪師に「江上の船は何隻か」と問われました。禪師は「ただ二隻のみ」と答えました。皇帝は「どうして二隻か」と問われますと、「一は名門の船、一は利養の船」と答えました。けだし名言であり、微妙な言葉です。私たちの日常は、名誉と利益のために動いているのがほんとの姿だと見すかされたような気

ぬ。それでなければ、教えを信ずる意味は全くないといわねばならない。

互に和み睦んで争うことなく、同信の人とともに住む幸せを喜び、表裏の別なく、慈しみ交り、私の心を捨てて、人々の心と一つになるように努めねばならぬ。

ここに教団が和合するようになるために、六つの方法がある。

第一には、教団の人々がみな表裏なく語り暮し、お互になさけの言語を以て接しながら生活してゆくのである。

第二には、教団の人々が表裏なく語り合つてゆくならば、次にお互になさけの行いをすることである。言葉の通りに行動にあらわし、いつくしみ合う生活を送るのである。

第三には、教団の人々が表裏なく語り、また行ふならば、お互に心の中までその通りでなくてはならぬ。うわべだけでなくなさけの心を守り合つて生活してゆくのである。

第四には、教団の人々が物を得たならば、これをお互に分ちあわなくてはならぬ。お互に一つものでも分ちあう生活を送るのである。

第五には、教団の人々は同じ清らかな戒を

がします。「片ちぶさ、さぐるや欲のはつちぎり」、生れ落ちた赤ちやんでさえ、生きんとする自然のあらわれの仕事があります。成長すると、自分で目的を定めて、その方向に動きます。

それから次第に欲心が複雑となって、求めて得ざる苦しみ、求め得てかえって苦しむことが起ります。是非善悪の心が起っても、悪いと知りながらこれを行い、求めてやまぬことになります。反省し悔いながら、どうにもならぬ自分に愛想をつかす結果ともなります。ここで現実の理想とは、余りにも隔りができて、どうにもならぬ自分を見い出すのが常であります。

この現実のこの岸の生活から、理想の彼岸への向上を指し示されたのが彼岸への教えであります。

彼岸会布教

由来人間は昔から欲のかたまりだといわれますが、人が生きていくということは欲望の動く姿であります。その欲望のままに動いている人の心は、様々の知性の欠点があり、道德的欠点もあり、こうした欲望のままに動く姿が

煩悩ということ、この煩悩が悟りのもとであり、煩悩と悟りとは別のものではないのであります。「しぶ柿のしぶそのままだが甘味かな」と申します。渋柿の渋を取り去ったからとて甘味になるのではなく、甘味の唯一の素材が捨てようとした渋そのものであります。

煩悩という渋を取り去ったとて、悟りという甘味が得られるわけではないのであります。すなわち、我々の現実の生活を離れて悟りはあり得ないのであります。

我欲を取りのぞいてしまったら、人間としての生活が成り立たないので、雲を食い、霞を吸って生きてはいけません。人間の根本欲だといわれる三毒にしても、あるいは切り離すことができるにしても、我々が社会生活を営んでいる限り、その生活から煩悩をことごとく取り去ることはできません。

仏教は我々に無理な、できない相談を強いようとするのでありません。一切の人々が等しくふみ行い得るという真の道を教え示すものであります。最も好ましい自然の姿が仏の示された道であります。

守って、規律を尊ぶのである。お互に規律を尊ぶ生活を送るのです。

第六には、教団の人々は皆正しい見方を持つ。人々はお互に正しい考え方をもって生活するのである。この正しい見方をもつことは実は六つの方法の中心であって、これさえあれば、他の五つの方法が自然と包まれるのである。

また次に教団を栄えさせるには、七つの方法がある。

第一には、清浄を守って事の多きを願わない。第二には、欲なきを守り、常に多きを欲することなく、互に貪らぬようにする。第三には、忍耐を旨とする。お互に忍びあって他と争う事のないようにする。第四には静かにし、寡黙を守って、お互に騒がしくなく、たわむれることなく、静黙のうちに暮すようにする。第五には、法を守って、自分勝手な議論をしない。まして自説を張ったり、おごった気持をなくすようにする。第六には、一心を守り、他の邪教に従わない。第七には、儉素を守って、衣食についてつましくすることの七つを守れば教団は衰えない。

(豊山派宗務総長)



月と兎

石上善応



天体に関する伝説は、世界中にその数はまことに多い。

中でも太陽と月については宇宙の代表的なものとして、有名な説話がいくらかもある。しかし月の中に兎がいるという話は科学がどんなに発達しても、子供ばかりでなく誰にも懐しい伝説である。たとえ月旅行が実現したにしても、月の中で兎が二羽餅をついているという夢は、決してみはてることのないものと思われる。

しかし月に兎がいるとばかりは限らないで、いろいろの説話が残っている。アイヌ叙事詩のユーカラでは、人のいうことを聞かない子供がいて、ある時その子供が水汲みを嫌ったために月の中に閉じ込められた話が残っている。これは月の中に童子がいるということである。ドイツでは薪を背負った老人がいるという話があるが、その他西洋では

婦人、一本鋏の蟹、駱駝などがいる話がある。また二人の子供がバケツに水を汲んで、天秤棒で担いでいるのだというのもある。

中国で月の中に蟠や桂の樹があるという話もあるが、もちろん兎がいる話もある。五經通義に「月中に兎と蟠がいる」とあるのに対して、青木正児博士は「蟠は中国本来のものであるが、兎はやはり印度から伝ったものと認められる」といわれている。

今昔物語の天竺部にこんな説話がある。

「兎と狐と猿とが仲よく暮っていたが、ある時彼等が道心をおこした。それと知った帝釈天が、彼等の道心の程を試みようと思い、老人に化けて供養を請うた。すると猿は木の実をとってきて供養し、狐は魚をとってきて供養をし

た。ところが兎は不器用なので、猿や狐のようなことができなかった。そこで兎は薪を積み、それに火をつけ、自ら火中に飛び込んで焼け死んだ。兎は我が身を供養したわけである。帝釈天はこれを慇懃んで、兎の姿を月中に移し、普く衆生に見せることにした。従って月の面に雲のように見えるものがあるのは、兎が火に焼かれたときの烟である」

巴利文本生經第三一六に出ている説話はこうである。

「昔、ペナレスでブラフマダッタ王が国を治めていたとき、菩薩は兎の胎に生れ、森林に住んでいた。この兎には猿と豺と獺との三匹の友だちがあった。あるとき兎は三匹の友達に『明日は布薩会です。皆さんも戒を受けて布薩を行いなさい。堅く戒を守って施をすれば、大なる果報があります。ですから乞食がきたならば、食物を施しなさい』といった。

翌日、獺は魚の串さしを見つけ出し、口に咬えて帰ってきた。豺は二串の肉と大とかげと一壺の牛酪を見つけ出し、口に咬えてはってきた。猿は森の中に入り、アンバの実をとって帰ってきた。ところが兎は草しか食べないので、乞食に施すようなものがなかったので、自分の身を施そうと考えた。

帝釈天が婆羅門の姿となって彼等のところにゆくと、獺

や豺や猿はそれぞれ食物を施してくれた。しかし兎には何もなかったので、兎は火を作るようにいい、自分の毛の間に生物がいたら可哀そうだと、三度その身を震い、喜びの心で火の中に飛込んだ。だがその火は兎の体の毛孔一つも焼くことができなかった。しかも兎は少しも熱さを感じなかった。

帝釈天はこういった。『賢者よ、私は婆羅門ではない。

私は帝釈天で汝を試すためにきたのである。兎の賢者よ、どうか汝の徳が世界中に知れ渡るようにしたい』帝釈天は月の面に兎の姿を画き、当の兎を柔いダツバ草の上に寝かせた。この四匹の賢者は、その後も仲よく楽しく戒を守って暮した」

梵文菩薩本生鬘論（ジャータカ、マラー）に次の記事がある。

「時に帝釈はかの優れたる行為を知らせんがために、世間に利益を見せしめんとして、最勝なる宮殿、帝釈宮と諸天の集会せる善法堂の高樓の尖端において、兎の影の形を以て月輪に飾りたり」

「今や鏡に影を写せる者輝く如く、満月の時かの兎の影は天において輝けり」

パンチャタントラ（五篇の物語）には最も古い形と思わ

れる「象と兎と月の物語」がのっている。即ち

「あるとき、十二年の長い間雨が降らなかった。そのため生物はみな苦しんだ。ときに象の王様でチャトゥルダシヤナという象がいた。他の象たちが『水を満足にのませて私たちを助けて下さい』というので、王様は象たちに水を探させた。その中である象が戻ってきて『ここからそう遠くない所にチャンドラサラ（月の湖）という湖があって、満々と水をたたえています』と報告をした。王様はさっそく、一同を引きつれてその湖に行った。ところが湖の近くには沢山の兎が住んでいたのであるが、象たちがやってきて、この兎たちを踏みつぶしてしまった。

兎の王様は象のしぐさに憤ったが、ヴィジャヤという兎が一計を案じて、象たちにかげ合うこととなった。この兎は象たちのいる所にきて高い所に登り、象の王様に話しかけた。『象さん御気げんよう。私は月からきた月のお使いです。お月さまがいうには、象たちは他のもののことを考えずに、月の湖を荒した。しかも普段から可わいがっている兎たちを多く殺してしまった。これは実に悪いことだと知るがよい。もしも象たちが更に害を加えるならば、ただではすまないと知るがよい』これを聞いた象たちは大いに驚き、『賢者よ、われわれは本当に間違っていました。今

から決してお月様の邪魔をしません。私たちは何処かでお月様にお目にかかりお詫びを申上げたいものです』そこで兎は象たちを連れて月の湖にきて、水面の満月をみせた。象は体をきれいにしてからと思い、水の中に鼻を入れると水が動いて、月が干にも見えた。その時、兎は、象が水にふれたので、月が怒ったのだと叫んだ。象は全く恐れ入って逃げ帰り、もう二度とは来なかった」

ここでお月様（シヤシン）とは、言葉の上で兎を持っていくという意味がある。

印度は寓話、動物説話、お伽ばなし等の創作には適した所である。輪廻の思想から、人間界と動物界との間に相違がなく、動物が物語の主人公となっても、それは全く自然なことであった。そのためにどの国よりも豊富な物語文学が印度にある。これらの説話が印度を離れて欧州にゆき、アジアの全ての国へ渡り、アフリカの諸民族の間にまで伝ったことは、まさに驚くべきことである。従って逆にいえば、多くの国の間に流布されている説話が、その源を尋ねると、印度に由来していることが解るのである。

紀元前四世紀の初めに南中国で作られた「楚辞」の中に、月は何の利益があつて兎を腹に入れてるかという意味の顧兎在腹の一節があるが、印度から中国に伝った月兎説の

布施の功德

釈尊は布施の功德を語られました。

「バジャーパティールよ、いつくしみの心は、すべての善事のものである。人がつねにあわれみの心を持ち、よくその財物を布施するならば、その人は大なる功德を得るであらう。」

バジャーパティールよ、世にはよく、私には他に施す財などない、というものがある。しかしそれはその人に財がないのでなく、真実がないのである。どんな貧乏な人であっても、少々のパンくず位は持っているであらう。それを蟻に施すのも立派な布施である。またどんなに暮しに困っている人でも、まさか裸ではいまい。自分の衣の糸を一本抜いて、他のほころびを繕うのも、また大なる施しである。バジャーパティールよ、またまことに一物もなく、身一つであ

るならば、その身をもって、他の奉仕をたすけるがよい。それもできぬ体であったなら、ただ他が施しをするのをみて、よろこびの心を起せ。それだけでもその人は大なる功德を得るであらう。

バジャーパティールよ、自分が大に富んで、然る後に大に施そう、などと考えるはならぬ。昔一人の男があつて、一月後に大勢の客を招待することになった。彼は牛乳を馳走しようと思つたが、大きな容器もなし、腐らせてもいけないと考え、牛の腹の中に貯めておくのが一番よいと、その一カ月間、十分に牛乳を吞ませた仔牛を隔離して客を待った。そして仔牛の乳を搾ったら一滴も出なかった。富んでから施そうと考えるのは、この愚かな男のようなものである。バジャーパティールよ、要は心である。その心がなければ、国王といえども、一銭の施与もできないであらう。

ために、中国本来の伝説が駆逐されてしまった。

仲秋の明月に壇上に土人形の鬼神、トルイエ（兎児爺）を安置し、ユエピン（月餅）を供え、香をたき、花火を鳴らして月を礼拝する儀式は中国のものになりきつたものである。日本でも同じく、芒を生け、団子、枝豆、柿、栗などを供えて明月を拝むことは、形式や風俗を異にしていると同じものである。

竹生島に「緑樹影沈んで、魚木に上る気配あり、月海上に浮かんで兎も波も走るか、面白の島のけしきや」とあるのは、建長寺の僧自休が竹生島に詣でた時の詩に清波月落兎奔浪の一句があるのを引用したもので、月中の兎も波を走るが如き景觀を讃えたものである。

元来、譬喩なる言葉について原語をさぐると、三種類のものがある。それを訳せば、譬喩、比喻、対比、直喩、因縁、演説解悟経など多くの訳語となる。後には仏教の重要な一項目となり、十二部教の中には譬喩として配列されている。この譬喩は、阿波陀那であつて、本来は英雄的行為とか、偉業などと訳されるものである。本生物語は、この英雄的行為、偉業としての意味をかなり強く持っている。だが阿波陀那はそれだけに留まらず、業思想とも直結し、大乘仏教にいたっては、実に強く押し出されてきている。

ほおずき市



一瀬
直行

扇屋の暖簾は三代にわたる老舗であつた。

浅草の扇屋といへば、一応世間に名が通つていた。上物の扇子とか、団扇を専門に商つてゐる。浅草のうちにも同じような店が何軒かあつたが、時代の流れにおされて、廃業したり、転業したりしてゐた。その中で扇屋の主人吉三郎だけは古い暖簾を守り通し、今日にいたつた。

吉三郎は明治の生れで、同じ浅草の土地で生れた。だから、彼の半生のうちには関東の大地震と戦災とにあつて来ている。そのたびにまる焼けになり、立ち直つて来た。

どつちかといへば小柄な方で、年よりも若くみえた。商売柄和服で通し、角帯をしめ、店にゐる時は前かけをしめていた。いつもきちんとして身なりを崩したことがない。そういえば彼の性格も曲つたことが出来なく、至つて生真面目な男であつた。それを裏返え

せば、頑固で融通のきかない男ということにもなつた。

彼は店の関係で浅草より一步も出たことがなく、又この上なく浅草を愛してゐた。それも戦後うつり変つた今日の姿ではなく、ずっと古くからの浅草の姿を懐かしがつてゐた。そこには明治の香さえただよつてゐる。つまり学生時代に遊び歩いた浅草、目蓋のかげには十二階とか、宮戸座とか、江川の玉のりとか、さては赤煉瓦づくりの仲見世、仁王門、花屋敷、瓢箪池、オペラはなやかな頃の六区が浮かんで来た。

「この頃の浅草は随分變つて、味もそつてもなくなりましたね。世の中がそうなたたためでしょうが、やつぱり以前の浅草が忘れられませんか」

そう人からいわれると、わが意を得たように彼はうち喜んでゐた。

ともかく今日までかたく店の暖簾を守つて来た。というよりは、安易に暖簾によりかかつて来たためか、将来のことよりも過ぎ去つたことがらに心がとらわれがちであつた。そして世の中のうつり変りを頑固に拒み続けてゐる。

吉三郎の日常は規格にはまつたように、きわめて几帳面であり、いい加減な真似が出来なかつた。人がみれば、さぞ窮屈であろうと思うが、本人にとつてはこの方が楽であつた。又、人によれば、あんな暮らし方をしてゐたのでは、さぞ面白おかしくもないであろうと思うが、本人にとつてはこの方が楽しかつた。

たとえば夜は早く寝て朝は早く起きる。三度の食事ときは、きちんと時間を守つてゐる。一事が万事この通りの生活をおしきつて来た。

扇屋は三代にわたつて同じ土地に店をはつて来たが、戦災の時に焼けてしまい、又もとの所にバラックを建てた。今日周囲は以前にも増して立派に復興したが、その中で取り残されたように店つきは、当時そのままのお粗

末な平屋建てのバラックであつた。それでもなまじつか新しく建て直すよりは、もつとも彼にそれだけの能力はなかつたが、この方が暖簾にふさわしく奥床しいと、負け惜しみをいつていた。

既に古びた店つきであるが、彼は季節の装いをこらすことを忘れなかつた。そこは土地つ子だけに浅草周辺の一年中の行事には、たとえばお祭りとか、市がたつとかいう時には、なにごとを差置いても出かけていつた。そのたびに子供のように浮かれ、古くからの情趣を懐しがつていた。この頃の季節だと、お富士さまの植木市で買つて来た風鈴を窓辺につるし、店さきには鉢植の草花を飾つていた。そして今から七月の酸漿市を楽しみにしている。

いつも吉三郎は狭く薄暗い店さきに、きちんと前かけ姿で坐つていた。足一つくずしたことのない彼の頭髪には白いものが目立つて来た。白く扇屋と染め抜いた紺の暖簾を見ながら、そこには三代にわたる血が流れていると思つた。格別隆盛にすることもないが、衰えさせてはならぬ。父祖から課せられた吉三

郎の大切な職責であつた。

そうしている時の自信ありげな彼の姿を見ていると、ちよつとやそつとではびくともしない強靱さがあるかのように思えるが、実際はだいたいぶぐらつて来た。今日扇子や団扇だけを専門にしていたのでは、到底かつてのは



なやかさと呼び戻すことは出来ない。それはそれとしても、まるで挾撃されたように内と外からゆさぶられ通っていた。

扇屋の暖簾のかかつた通りは、仲見世から六区の映画館に通じる狭い横町であり、小商人やしもた屋が多く、普段は人通りも少な

つた。それがここ一二年のうちにキャバレーやバーや喫茶店が、たちまち軒並び、様相が一変してしまつた。夜おそくまで騒々しいのは辛抱するとしても、背をまる出しにしたどぎつい化粧の女達が、往来で酔客とふさけ合つたり、愚顔隊どもに調歩されては、彼にとつてにがにがしい限りであつた。

そうした外からの攻撃もさることながら、内からの攻勢も一段とはげしさを加えていつた。女房まきは後妻であり、田舎者であつた。彼は小柄で瘦せていたが、まきは大柄でふとつていた。よく蚤の夫婦とかげ口をきかれていた。一方が神経質すぎるなら、まきの方は暢気で屈託のない女であつた。そして先妻との間にはひとりつ子の秋夫がいた。現在私立大学の文科に通っている。ともあれ、一家は淋しい三人暮らしであつた。

吉三郎は明治の生れで、まきが大正の生れ、そして秋夫が昭和の生れである。それぞれ時代が異なるように三人が三様、ものの見方、考え方が違つていた。たとえば暖簾一つをとつてみても、

「暖簾といえ、私の生命も同様で、それ

を守ることが私の生涯です」

これは明治生れの吉三郎の考え方である。ところが

「どうしてそんなに暖簾が大切なのか、わたしにはわかりません。まるで人さまの借金を背負っているようなもので、馬鹿々々しい話である。執着なんかありませんとも」

これは大正生れのまきの考え方である。そして、

「あんな微臭い暖簾なんか、はずして捨ててしまった方が、さっぱりする。それよりも店さきにネオンサインかなんか明るい広告燈をかかげた方が、よつほど気がきいていると思うね」

これは昭和生れの秋夫の考え方であつた。

夫婦の間、親と子の間に出来たこの溝は段々深まり、到底一つにまとまりそうもなかった。各自が背を向け合い、勝手気ままに暮らしていた。そのうちでも、吉三郎の悩みは深く、大きかつた。それというのもひと粒種の秋夫が父のあとをつぐことを承服しなかつた。

「なんといわれても、ほくはいやです。お

父さんの前ですけれど、商人は大嫌いです。

誰がなるもんか！」

と、秋夫は相手にしなかつた。最初のうちは父に反抗していたが、この頃では全然そばによりつかず、顔を見られないようにしていた。

なにがために今日まで秋夫を育て、大学にまで通わせて来たのか。すべては父の立派なあととりとなり、扇屋の四代目をつぎ、暖簾をもり立ててもらいたいためではないか。そこに父の生きがいがあり、今日まで努力して来た。それを頭から商人なんかにはならないと蹴つている。どうしても秋夫の気持を理解することが出来ない。なまじつか大学にまでやつたのが悪かつたのかと、彼は後悔していた。

自分一代で扇屋の暖簾が消えて無くなるなぞと、彼には思いも及ばない。あきらめたくも、あきらめようがなかつた。彼にはこの年になつて、こんな悩みにぶつかろうとは、夢にも思わぬところであつた。

伴が伴なら女房は女房で、この頃は家をそとに遊び歩いていた。丁度同じような仲間が

近所に出来たらしい。が、まきにいわせれば、陰気臭い家の中で仏頂面の吉三郎と顔をつき合わせていたのでは、こつちの寿命までがちじまつてしまうという。

同じ遊び仲間の一人である近くの小料理屋のおかみは、まるで人の秘密でもうちあけるようにして、

「あんたは結構な御身分ですよ。お宅の場所が欲しいといつて、あつちからもこつちからも買い手が競い合つて、今日では莫大な金額になつていっているではありませんか。本当に羨ましい！」

と、まきの耳もとにささやいた。これは寝耳に水であつた、もしあの土地を手放せば、黙つていても、何百万という大金がころげ込んで来るといふ。もしそうなつたら、早速都心から少しはなれた所にアパートを建て、気楽に暮らしてゆきたい。そうしても、まだ相当に金が残し、使いきれないような気がする。だが、とても夫は承知しまい。浅草あつての扇屋である。浅草の土地をはなれて、扇屋は成り立たない。あの土地には三代にわたる長い間の労苦がしみ込んでいる。扇屋とい



えば、土地に深く根をはった巨木ではないか。どんなことをしてもおし倒すことは出来ない。これは夫の口癖であり、唯一の自慢であつた。なんという執念であろう。

かりにあの土地を手放して得た金を他に生かしたとすれば、現在扇屋の暖簾が月々上げる収益よりも、何倍かにふえる。このわかつたことが、どうして夫には通じないのであろうか。とても夫が生きている間はない。そうもない。といつて、夫の死を待つわけではないが、こんな愚かな生活から即刻抜け出

し、まきには存分なことがしたかつた。

今年は入梅に雨が少なく、近在の農家は困つていた。それも七月に入つて天気はぐずついていたが、珍らしく酸漿市には晴れ上がつて、浅草は最近にない人出をみた。吉三郎は例年通り鉢植の酸漿を買つて来て、店さきに飾つていたら、ちらつと往来を行くせんべい屋の親爺を見かけた。

「中井さんじやありませんか。よつていらつしやい」

と呼び止めた。せんべい屋の親爺とは、戦前隣合わせて住み、格別懇意にしていた。

戦災の時女房子供を亡くし、嫁にやつた娘の所に厄介になつていると、人づてに聞いていた。

「浅草の酸漿市ときいて、遂懐しくなつて田舎から出て来たんですよ」

「それにしても素通りは、ちよつとひどいでしよう。お互に年をとりましたね」

「いや、あなたは若い、昔と少しも變つていない、あれからずつと嫁にやつた娘の所にいます、居候はつらいですよ。そこへゆくと、あなたがつくづく羨ましい。浅草の扇屋

といえは知らない者はありません。戦災にあつても、こうしてもとの場所で信用のある暖簾をはつていられるんですから、こんな幸福なことはない。信用は金で買えませんからね。よくおやりになります！」

「そういつてくれるのは、あんたばかりですよ」

思わず吉三郎は胸がつまつて、二の句が出なかつた。

その時窓辺の風鈴が涼しい音で鳴つた。つとめの時間が迫つているのか、キヤバレーやバーに働く若い女達が、絶え間なく店さきを往来していた。

(荻原弘志え)

九月一日を迎える

関東大震災といつても知らない人の方が多くなつてしまった。本年はこの記念日が二百十日に当る。二百十日の厄日も近頃では台風予報が発達して、特にこの日を警戒する人が少ない。災難は忘れた頃に来るといふ。こうした天災は不可抗力ながら十分注意していると最少限度に被害を防ぐことができるという反語かも知れない。

第十八願文は

作り事か

解答者 小沢 勇 貫

問

拙者、最近、「河口慧海」(河口正著、一九六一年四月二〇日、春秋社発行)なる書を一読するに、

その二〇三ページに、河口慧海師がかつて著せし、「在家仏教」の梗概が記してあつて、其の中に、

『阿彌陀仏(梵語では無量仏、即ち多数の仏の意味で、極楽世界の教主無量寿仏を意味しないが)は西方極楽浄土の教主であつて現世の本尊ではない。「南無阿彌陀仏」と称えることによつて極楽往生が出来る」という文句は、原書梵語無量寿経はもちろん、チベット訳經典及び他の漢訳經典の何処にも書いてないのであつて、かかることの書いてある康僧鎧の訳した無量寿経第十八願文は無根のつくりごとである。これを釈迦の説かれた教と信

じたのは、その時代には未だ原典を知り得る便宜がなかったために陥つた誤りである。云々』の一文があります。

河口慧海師は、人も知るところ、並々ならぬ傑僧であつただけに、右の一文は氣にかかります。

従来右に対する宗門的解釈はあつたのかも知りませんが、どうか改めて宗門の諸先生の御解明をお願い致したく、なお、「浄土」誌上に御指導下さるよう切にお願いいたします。

(三浦市に住む一老僧)

答

河口氏の見解の当を得ない三点について説明しておきます。

第一に河口氏は阿彌陀仏だけでは無量仏となつて即ち無数の仏であるから、極楽世界の教主なる無量寿仏とはならないと

された。阿彌陀の名称については、阿彌陀經にその仏の光明寿命が無量無辺なので阿彌陀仏と名づけると、由来をはつきり示されている。訳經家も光明寿命無量の意義を含めたものとして、古く支婁迦讖がこの訳名を用い、支謙や竺法護、また羅什に至つても、その後の訳經家も多くこれを踏襲して來た訳で、この語の古来の解釈は、經典の上にまた翻譯の上にも根拠のあつたことなのです。もとよりこれらの訳者が原語に無知であつた筈はありません。

第二に河口氏によれば阿彌陀仏(無量寿仏として)は極楽世界の教主であつて、この世界の本尊とはならぬと云う。なるほど阿彌陀仏を教主として説く觀音授記經の例もあるが、無量寿経を初め多くの經典には、救済の本願を成就された仏として宗教的にあらわされ、長い信仰の史実もその通りです。即ち阿彌陀仏は極楽世界の教主であるばかりでなく、現にここに攝取の光を与え、われら衆生をその浄土に導きたもう仏なのです。このゆえに浄土門では信仰の本尊とするのです。およそ仏教に説かれるいかなる仏も浄土

も、現実の人生に無交渉な筈はありません。一仏世界の觀念にとらわれて、宗教としての意義を見失ってはなりません。

第三に称名往生は、梵語の經典、チベット訳漢訳の經典のどこにもないと云われる。河口氏は特に梵本無量寿經の本願文を重視して、康僧鑑訳とされる現行本第十八の願文は無根事実とまできめつけられた。現存する無量寿經の諸本には各々特色が見られ、梵本より古い成立のものもあつて、それぞれ原本があつたものと考えられます。梵本はもとネパールで発見された甚だ誤りの多い写本で、その刊行には学者が随分苦心し相当訂正を加えたものです。河口氏は康僧鑑訳第十八願は、梵文を故意に改作したものと云われたが、菩提流志訳にも対照すれば、かような断定は危険と評さなければなりません。

道綽善導の諸師はよく三部經の精神を見ぬかれ、殊に觀無量寿經下品にある「至心に声をして絶えざらしめ十念を具足して南無阿彌陀仏と称す」の經文から、無量寿經第十八願十念の文を味得されたのです。のみならず八宗の祖と仰がれる印度の竜樹菩薩が十住毘婆

沙論に阿彌陀仏の本願をあげ「我を念じ名を称して自ら帰せば云々」と、弥陀本願の行を称名と解釈された。無量寿經諸本の中もつとも古い成立と考えられる大阿彌陀經に、阿難が仏の教えのごとく西に向つて礼し、南無阿彌陀三耶三仏檀（南無阿彌陀正等覺者の意）と唱え、阿彌陀仏大光明を放つて照し、衆生みな仏を見たてまつり、三塗の憂苦を解脱したことが説かれています。これは称名の明文と云えます。この仏の称名だけでなく、阿含諸經から、法華經、思益經、大悲經、仏名經等の大乘經典にも称名の法は広く説かれ、竜樹の諸仏のみ名を称えれば、仏道に於て退転しないと盛んに称名の法をすすめられた。浄土經典には「仏を念ずる」、「仏の名号を念ずる」、「名号を執持する」、「仏名を称する」ことが往生の要行とされていますので、称名の信行を導く根拠が明かにかがわれるのです。なお称名の行に平等の大悲を仰がれた先徳の尊い信仰体験について述べる必要を感じますが、こうした信仰の面が全く河口氏の理解にかからなかったことは遺憾でした。今はただ氏が批議された經典上の根拠について略して説明しました。

和 楽 の 国

教えが弘まるといふのは、心を養ひ修める人が多くなつてゆくことである。この世の中を支配していた無期と愛欲の魔王が率いる貪り怒り愚かさの魔軍が退いて、ここに智慧と光明と信仰と歡喜とが、かわつて支配權を握ることになる。

惡魔の領土は欲であり、闇であり、争いであり、剣であり、血であり、戦いである。そねみ、にくみ、あざむき、へつらい、おもねり、かくし、そしることである。

いまそこに智慧が輝き、慈悲がうるおい、信仰の根が張り、歡喜の花が開く。惡魔の領土は、一瞬にして仏の国となり、微風そそろに吹きわたり、和楽の春となる。

一輪の花が春のきたことを告げるように、一人が悟りを開けば、草木国土、山河大地、ことごとくみな浄土となる。なぜなれば、心が浄ければ、そのいるところもまた浄いからである。

一人の心の上に打ち建てられた仏の国は、同信の人を呼んでその数を加えてゆく。

彼岸のいわれ

山下 八 古

しつかえあるまい。

「彼岸日和」という言葉が、そのままに当てはまるような、好適の季節になると、しみじみと「生きがい」を感じるようになる。この世に生み出されたおのれの生命の、ありがたさ、尊さが実態となつてせまつて来る。

そうした感懐にひたっている時、訪れて来るのが「ひがん」である。彼岸が春秋二回、仏教徒によつていとなまれる行事となつたのはかなり古いことのようにあるが、これは、しいて作り上げられたものではなく、また、ことさら教義教説から導き出されたものでもない。それだけに、日本人の生活感情と宗教的情操とをムリなく、自然に結びつけて来ているといえよう。すなおな心に立ちかえつて、無心に「仏教を思う」ことこそ、彼岸にふさわしい人間のアリ方であるといつて、さ

「彼岸」とは、いうまでもなく「此岸」に對する言葉である。それだから、彼岸に行くには、此岸から離れねばならない。何故「彼岸」にわたらねばならないのか。

これには二通りの意味がある。その一つは「此岸」はいとうべき、みにくい国土だからである。そして、第二には、「彼岸」はうつくしく、よろこばしい国土だからである。人間として、誰一人、醜いもの、悪いものを好むものはない。すべての人は、うるわしいもの、よりよきものを求めてやまない。そこに、人間が他の動物と異なる「人の道」があるのである。彼岸を求める心は、人間の人間たる本然の心といえよう。この心なくして、なんぞ「ひと」といえようか。

それにしても、どうして、世の人々の多くが、この尊い「ひと」の心を忘れがちなのであろうか。

「犬を枷（か）して柱につなげば、終は、二十五有をめぐりて、はなるることなし」と、仏典に説かれているとおり、人間も、この世という柱につながれて、せまい世間から脱れることも出来ずに一生を終つてしまう。それは、うるわしく、たのしい国を、あまりにも遠く、あまりにも高くに求めるゆえである。とうてい、自分達には及び得ない国であるとの、あきらめの心がウラハラとなつて、かえつてこの苦の世界に、みづからを投げこもうとする、人間の持つ悲しい自虐性の反面といえよう。

自分の力で、自分の足で、かの国に行こうとするところにおこる、「人間の矛盾」である。自力の道が「難行道」と呼ばれるのは、このゆえである。

三

彼岸は決して遠くない。彼岸との間によこたわる河の長さは無限であるが、その幅は指呼の間である。耳をすませば、彼岸から、お

桐 一 葉

南 久 芳

昔は、おんなの子が生れると桐の苗をうえて、その子がお嫁に行く頃になると、立派に育った桐の木で、嫁入道具のタンスを作ってやったそうである。

同じ桐の木でも、苗からの木よりは、切株からはえた芽ぶきのほうが、目が細かくて、質がよい。だから、桐の木を売買するとき、根ごと掘って買うと高い。普通の材木と少しちがう。

桐の木にはムダがない。太い幹をみて、これは立派なタンスが出来ると思うのは、何も知らぬシロウトである。タンスの材料には太枝をつかうのだそうである。その方が同じ年輪でも、グツとこまかくしまっているからで、これをいくつもハギ合せてタンスをつくる。幹からは下駄材をとる。そして、先の方の小枝は、小箱屋が買いに来る。色とりどりの、少女の喜ぶ美しい小

箱がこれからうまれるのである。

そして葉は、秋深く、空の深まって来ると、音もなく、一葉、また一葉と、静かに散る。まさしく、秋の風情を告げる風物詩である。

桐一葉、落ちて天下の秋を知る

落はくの戦国武将の感懐も、桐の葉によって歴史の中に生きて来たのである。

庭の真中に立つ、一本の桐の木を眺めながら、私はこのような話を古老からきいた。

タンスになり、下駄になり、小箱になり、そして、魂の底から湧き上がるような秋の静けさを物語る桐の一葉。諸行無常の真諦は、なにげなしに立つ桐の木一本にも生きていることをしみじみと感じた。

のれを呼ばう声がきこえて来る。

「なんち、一心を念にして、ただちにきたれ、われよくなんちをまもらん」

こころにしみいるような、澄んだ、みほとけのお声がきこえて来る。そのように、河の幅はせまいのである。その声をたよりに、心をおちつけ、躊躇（ちゅうちょ）することなく、そこに通ずる「白道」を渡れば、やすやすと「彼岸」にゆきつくことが出来るのである。仏を念じ、仏力を信じ、自分を投げすてて、一心になればよい。いたずらに、逆まわ河の流れに氣をとられ、おそれおののいていては、永久に、此岸に佇立していなければならない。

「彼岸」の行事を、このようにうけとつて、七日の期間、心を静め、仏を念じ、仏名を唱え、天地自然の温順な季節そのままのころを抱いてすごすように、心がけたいものである。

そして、「ひと」として、みづからが本来もっている、美しく、楽しいものを求めるころを、より一層に、はぐくみ、育てて行きたいものである。

いじわる村長さん

みなくち・まさひろ



小川は夏の間はいつも子供たちの遊び場だったので、そばにコン助村長の家ができてからは

「キレイナ水ガニゴルカラ、

ココデ水遊ビヲシナイコト

コン助村長」

という立て札が立てられてし

まいました。暑い夏を子供たちは泳ぐ場所もないままに過ぎなければなりませんでした。

森の木の葉が少し色づきはじめてそろそろ涼しくなる頃、気まぐれな風が吹いたり、雨が降ったりすることが多くなりました。

ある日のこと、いつも村の連絡係をしているカラスのカー吉があわててコン助村長の家の戸口へやってきて云いました。

「村長さん、コン助村長さん、大変です、早く戸を開けて下さい」

「なんだ、うるさいな。カー吉だろう、いつもギヤーギヤーと騒がしいのは。なんだ、なんだ」

とコン助がうるさそうな様子で出てきました。

森の入口にある大エノキの下の草原が動物村の公会堂でした。いつも相談ごとがあるときには、みんな木の切りかぶをテーブルにしてそのまわりに集まりました。今日の集まりは「ヒゲ村長さん」と親しまれたヤギの白兵衛さんがオシイサンになって村の仕事ができなくなったので、新しい村長を決めるためのものだったのです。この村では昔からみんなが代り番で村長さんになるのがならわしだったのですが、今度ばかりはみんな黙って考えこんでしまいました。きらわれ者のキットネのコン助に順番がまわってきたからです。誰れもがいじ悪でケチン坊なコン助には反対だったのです。けれども村のきまりはまげられませんかとうとう新しい村長にはコン助

がなってしまったのです。そうするとますます鼻が高くなるのはコン助とその奥さんです。奥さんはとてもオシヤレでいつもノコギリ草のクシで髪をすき、オシロイ花でお化粧してツンとすましていました。

村長になつたコン助は森のケヤキの根っこにあった家から日当たりのいい小川のそばに家を建てて引っこしてしまいました。新しい家はがんにようなヨロイ戸のある家で、コン助村長はそれを大変自慢にして誰れにもこう云いました。

「さあ、どんなに雨が降っても風が吹いてもオレの家はビクともしないんだぞ。緑の木蔭もあるし、そばにはきれいな小川も流れているし……」

「あのネ、村長さん、大変なんですヨ。モン太クンやミヤー子チャンたちの住んでいる隣村がきのうの大雨で水びたしになつてしまつたんですヨ。いまさつきボク、この目で見ってきたの。どこの家もみんな食べる物や着る物が流されてしまつて可哀そうだから、ボクたちみんなでお見舞を送つてあげたらと思つてお知らせに来たんです。」

「チエツ、そんなことか。よその村のことなんか放つておけ放つておけ、つまらんことでいつも騒々しい奴だ」

と云つてビシヤリとヨロイ戸を閉めてしまいました。

せつかく急いで知らせに来たのに少しもとりあつてくれないので、しかたなくカー吉はしよんほりしながら森の方へ帰りかけました。するとちようど森の入口のところで、黒いカバンを肩から重そうにかけたウサギの郵便屋さんに出あいました。

「やア、カー吉クンこんにちわ、だいぶ降られちやつたネ。どうだい、何だか少し元気がないようだけど……」

「あア、郵便屋さん、いつもご苦労さま。」

それがネ実は……」

とカー吉はコン助村長に話したことをそのまま郵便さんに話すと、

「エエツ、それは大変だ。大急ぎで村中に知らせてモンチヤンたちを助けてあげなくては」



「よーし、それじゃボクたちふたりで手わ

けしてみんなにふれてまわろうヨ」

そう決めるとふたりは

「グツバイ、またあとで」

と云いながら反対の方へ別れて行きました。

お見舞の品物は、その日のうちにあの大エノキの下草原に山のように積まれました。今度はみんなですれを運ぶ相談をしました。大きな荷車に積みこむと、力持ちで有名なクマの大五郎さんが引つばつてほかのみんながあと押しをすることになりました。誰れかが、

「大五郎さんは力もち、

けれども少しノツソリで

いつでも何か忘れます、

今日はボクらがついてます

落さぬように、ころげぬように

みんなであと押ししています」

と歌つたので、みんな大笑いしてしまいました。

した。大五郎さんも

「みんなで良いことをしてあせを流すのは

気持ちがいいなア」

ときどき顔のあせをぬぐいながら云いま

した。

隣村に着くとみんなは一生けんめいこわれ家を直したり、泥水で汚れたアパートの掃除をしてすっかりもとどおりにしました。モン太クンやミヤー子チャンたちに喜ばれた森

の村のひとびとは夕焼け道を合唱しながら帰りました。

五、六日たってから、今度はカー吉たちの森の村に嵐がおしよせてきました。けれども

人の世の姿

富める者は、富んでいるために苦しみ、貧しい者は、貧しいが故に苦しむ。

人々は僅かの利害のために、相互に争っている。そして相互に憎みあっている。しかし善と悪とは、そのよって来る報を異にしている。即ち善は幸福をまねき、悪は禍をもたらす。これは定まっている因果の道理であつて、どうにも人の力の及ばぬことである。

故に人は、自分が健康なときに、道を求めなければならぬ。道を求めずして、人生に何の楽しみがあるであろう。然るに人は、善悪因果の道理を信じようとしない。吉凶禍福の生じることわりを知らないで、いたずらに目前の現象について悲泣している。

すべてのものは変化する。従つて逆境に沈倫することもあるであろうが、この際人は苦しむことだけを知って、道を求めようとしな

大きな木にかこまれた森の中の家はビクともしませんでした。雨や風の吹きやんだ次の朝、たつた一軒だけあんなに自慢にしていた

小川のそばのコン助の家があとかたもなく流

い。目の前の欲に溺れて、孤狼のようにむさぼつて、飽くことを知らない。

あるいは恩愛につながれて、憂いにしほられる。欲望におぼれて、他と争っている。栄華の春も、永くつづくものでない。世に真に楽しむべきものは、何もないではないか。然るに人は、遠い昔から、迷いの世界を経めぐつて憂苦に沈潜している。ここに今日、仏陀の法にめぐりあい、仏陀の名を聞いて、法を信ずることのできるのは、甚だ幸福であると

いわなければならぬ。身を正しくし、善を行い、心のけがれを除き、自らを救い、更に進んで他を救わんと願わなくてはならぬ。

現在に五つの悪がある。即ち

第一には、人はもとより、獣や鳥や魚にいたるまで、互に争い、傷つけあっている。

第二には、親子、兄弟、夫婦、親戚の間に

されていました。コン助はもとのケヤキのほら穴の家にとじこもつて

「オレはもう村長をやめるよ」

とはずかしそうにカー吉に云つたそうです。

第三には、邪悪な心をいだき、あるいは徒党を組んで、非道を働いている。

第四には、相互に尊敬の念がなく、他を犯しても、あえて反省するところがない。

第五には、各自が欲望のままに動いて、他に迷惑をかけている。

これが人生の現実ではないか。

しかし道理は網の目の如く、いたる所にこまかく張りめぐらされている。このことに人は心しなければならぬ。この網の目にかかつて、糾問されることほど、惨めであり痛々しいことが他にあるかと思われる。

善因には善果があり、悪因には悪果があることを信じている者には、この張りめぐらされた網の目が見えるのである。これを信じないものは、目を開いていても盲と同じように、道理のあることが見えないのである。そして陥ってから気がついて苦しみなげいてもすでに間に合わない。

ゴネ得精神（投）

湘南電車に乗ったと申すと、温泉に保養に行くように聞こえますが、野暮も野暮の用件で、近く開かれる公判に証人となっていたただく人を訪ねるためでありました。しかし電車は伊東行きですから、ほんとの保養客も沢山見受けられました。

ご承知のように東京駅では、電車がホームに入る前から乗客は二列に整列しています。

私もその列に加って電車を待っていますと、前の方でわざと列に入らない高校生らしい若者が四人いました。やがて電車が着くと、その若者たちは当然のように列に割り込んで乗車しました。どうせ早くからホームで電車を待っているなら、何故列に入らないのでしょうか。簡単なことですが、一寸した規律にどうして従えないものなのでしょうか。若者が列に割り込んだのを見ていた後の方の保養客らしい人達がどっと前に割り込んできました。

さて電車に乗ってみると、さっきの団体客があちこちに席の先どりをしていました。通路に立った他の客から質ねられても「いまま

ます」の一点張りで、席をゆずりません。どうせ保養客は行儀の悪いものと自他共に許し鼻もちならぬ人たちですが、この団体客の席の先どりは、横浜から乗る予定のもののためにとつてあるのです。やがて電車が品川駅をすぎると、他の客と喧嘩となりました。こんな場合、婦人の方ははっきりしていて、席においてあった袋物を網棚に上げると、さっさと腰かけてしまいました。男子の方は文句をいいながら遂に腰かけませんでした。

話がそれましたが、私の訪ねる人に証人をお願いした訴訟とは、これまたつまらぬ事件で、不法占拠の立退き請求なのです。どこにもある事件で、型の通り個人交渉でうまくゆかず、調停裁判をお願いしたが、これまた先方が出席しませんので失敗し、本裁判となりました。今まで何回公判が開かれたでしょうか、とにかく二月おき位にしか公判がありません。調停裁判で私が初めて裁判所に行つてから四年になります。しかも裁判はあと何年かかるか予想もできません。この事件で私は甚だ困るわけですが、先方は裁判が少しでも延びれば、地代も家賃も払わずに営業で

きるのですから、それだけ笑いのとまらぬ利益となるわけです。

しかし世間には、幾人かの個人が頑張っているために、多くの人が迷惑している話はいくらでもあります。立派な道路ができて、そのまん中に一、二軒の家が頑張つて、その道路が使用できない所が東京にもありますし、地方にもあります。公共のことですら、こんな状態ですから、私ごとき個人の問題では、止むを得ないかも知れません。

不法占拠ですから、不法であるに間違いはありません。何はともかく他人の土地と他人の家を占拠して（もちろん無料）営業ができているのが実態なのです。個人の自由とか権利とか難しいことは解りませんが、こんなことでよいのでしょうか。アカハタ（ソ連国旗）をたてるのが、さも当然のように新聞等にも報道されますが、日の丸（日本国旗）をたてると右翼か何かのように思われています。こんな情ないことで独立国なのでしょうか。まことに嫌な言葉ですが、ゴネ得精神が当然のように蔓延して、誰にも手がつかぬのが実際ですが、これでよいのでしょうか。（岡本）



近代高僧伝

杉山大運

大橋 俊雄

「五万石でも岡崎さまはお城下まで船がつく、見たか聞いたか岡崎さまのお馬印の三つ団子」とうたわれた岡崎さま、城下板屋町に杉山半三郎の子として大運が生をうけたのは万延元年一月八日のことであつた。尊王攘夷の運動はめまぐるしく天下をかけめぐり、明日の日も期せられない有様。しかし何といつても岡崎は徳川氏発祥の地だけに其の動きはゆるやかで、三河平野一帯には信仰の種がひとされ、日課念仏を誓う在家の人々の心には信仰の火がもえさかつていた。

田畑を耕作するのに珠数を手にしていた人もあり、日課を誓約した農民の中には珠数で

念仏の数をとることはできなくとも、鋤を手にし土地の耕作面積によつて何百何千遍ときめていた人もいたという世相と環境の中で育つた彼が、寺門を叩いて得度したのは明治元年八月のことであつた。時に年齒僅かに九歳、師と仰いだ鑑普大基は岡崎の町並を去る北十余軒の地にあつた奥殿林宮寺の住職であつたが、師事後程なくしてなられたので同四年三月西尾の大様律庵に志運律師をたづね、ここで宗学と律儀を学んだけれども、律僧として其名一世に高かつた志運に師事したことが、彼の一生をして真の学徳兼ねそなえた徳僧として歩まれる道を開き、転向なさしめる

大きな原因となつた。時に志運三十七歳の春秋に富む頃であつた。

彼は美貌で、しかも能弁であつた。温厚玉の如き彼の性格は篤実そのもので、人あたりは極めておだやかであり、恰かも春風のように時々ユーモアをまじえては人を笑わすこともあり、聞く人をして屈托をあたえしめるということはいささかもなく、実に美しい花の前に談笑時をうつすという心地がしたというのも、一に彼の温厚誠実な性格と能弁がもたらした彼のよさであつたろう。彼が昌光律師に住したのは、師として仕えた志運の寂したのちのこととて、それは明治二十六年六月のことであつた。志運はどちらかといえば覇氣満々とした積極的な進出主義の人であつたが、大運はそれに反し師命を奉じ、ただ黙々と持律をもつて宗風をたてようとした保守的な人であつた。

しかし彼の美貌と能弁は人をひきつけるに十分で、授戒にしても布教にしても彼の出馬と知るや自然と集まつたといわれるほど、何処に行つてももてた人であつたという。書もすぐれていたし、絵にも趣味をもち詩文にも

長じ、和歌もやつたというすばらしい芸能の持ち主で、書はひとときわ秀いで、そのため彼の名をかたつて偽筆で生活していた人もあつたという。

具足戒を自から誓つて受けたのは大正五年であり、同十一年には正僧正に叙せられ、それより前明治四十五年二月には准司教になつていた。

又志運の残した志をついで大慈大悲のみ心のうちに慈無量講をつくつて、困つてゐる人を救済し、毎日きまつて法話をなされ、時に集まり結縁された人は頗る多く、更に出でて授戒会に五重相伝にと招かれたこともしばしばであつた。

しかしそれ等は全て扶宗護法のため止むに止まれぬ心情としてなされたものであつて、名利のためではなかつた。名利を念願からぬくい去り、ただ只管に自己の修養と宗門のためを思う熱情がそうさせたものであつたが、それはややもすれば保守的なものに進み行く傾向があつた。

それにしても維新前の上品にして温厚な僧風は、維新の波とともに漸次消えうせつつあ

つたが、その最後の人として大運のあつたことは高く評価されなくてはならない。それは又意識して容易につくり出されるというようなものではなく、長い間の風俗習慣が自然のうちにつくり出したものであつた。それだけに彼は誠に僧らしい僧としての風格をそなえていたといえるであろう。

知恩院門主孝譽現有が示寂し、願譽智海が増上寺から知恩院に上山し、時を同じくして香譽彦明が百山を退いた時、一宗は挙げて彼を百万遍知恩寺に迎えようとした。

一宗の清和をモットーとする清和会は、拝める人を推選の基準として学徳共にすぐれた彼をかつぎだし、承諾を得ないまま無理矢理当選させたとはいうものの当の本人はその策動におどろかさされ、固辞して頑として動こうとしない。

知恩院からも再三にわたり使いがあつたが、その任ではないと断わりつづけ、当局もその熱情にほだされ断念するという止むなきに至つた。

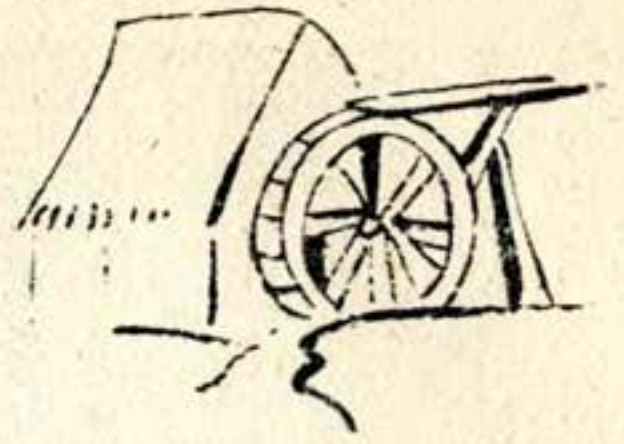
其後上山を慫慂されることもなく、持律厳しき中に静かに念仏を修し、宗法の興隆を念

じ、時に茶道も心得ておれば書画に対する識見も深かつた彼は、豊かな教養とさわやかな弁舌をもつて布教にこれつとめ、念仏の弘通に一身をささげたが、戦火ようやく酣なる昭和十九年二月病に臥する身となり、三月九日には空を仰いで合掌し、「ありがたいことだ、ありがたいことだ、幸せなことだ」と申されたという。歎喜し、静かに合掌し「ありがたいことだ」と申された心境を拝するに、恐らくそれは聖衆の来迎を拝されたからであつたろう。

戒律を守つて栄養の摂取を殊更に廃された彼は、衰弱次第に加わり翌十日法類僧尼親族たちの見まもるうちに、世寿八十五歳をもつて正念ねむるが如く円寂された。

法名を大運慧達和上といい、彼を尊敬し其の許に受法した人はかぞふるに遑なきほどであつたという。

寂後彼の後をついだのは森島大応であり、大応は法徳を慕つて「一実塔」を建立したが、その塔は大運の俗縁で、深く彼に私淑した歴史考古学の泰斗石田茂作博士の設計なされたものであつた。



ラーゲルの思い出……その二

実話 最後の演芸会

吉 野 翠 幹

くる日もくる日も、監督から働け働けと追いまくられた。三度の食事は一塊の黒パンとスーブ、又はドロドロに煮た燕麦と定つていて、ついぞ腹をくちくした憶えがなかった。

唯一の楽しみは寝ることだが、一夜あければまた働け働けであることを思えば、あまり楽しみともいい得ない。日本はどうなっているのか、家族はどうして暮しているのか、日本新聞によれば物価がうなぎ登りで、政治が悪いとしかのっていない。一体われわれは帰国できるのかどうか、家族と再び会えるのかどうか、何も判らない。

日本新聞がいかにもわれわれを同志諸君と呼んだところで、ソ連建設のために働く戦士と励ましてくれたところで、われわれがその気

になる筈がない。地の果まで拘引されて「働かざるもの食を与えず」と重労働を強制されて、何が光栄ある同志諸君なのかわからない。ウズベック共和国アングレンといつても、地獄にもない曠野であつて、それよりはナホトカからここまで汽車で二十四日を要して到着した場所であるといった方が判りが早い。

われわれが苦情をいうと、ソ連将校は「君等はドイツ収容所のことを知らないから、そんな苦情をいうのだ」といった。しかしわれわれはソ連と戦ったことがないのだ。ソ連が日本の停戦を知って満州に入り込んだだけであつて、われわれは捕虜でもなし、重労働を課せられるわけがない、というソ連将校も黙ってしまった、「われわれは命令でやってい

るだけだ」という。

こんな毎日が続く内に、誰からとなく演芸会をやろうといい出した。そこで毎月一回、日曜の夜に食堂で開くことにした。食堂の机を集めて舞台とし、第一回は尺八とハーモニカの独奏、いくつかの歌謡曲の独唱であつた。上手下手は別として、曲目毎にアンコールが続き、予想以上の大成功であつた。

第二回には、マンドリン合奏が出現してびっくりさせた。もちろんマンドリンは手製であるし、楽譜も即製のものではあつた。それにもましてやんやの喝采をあびたのは、女形の衛生伍長が、帯を胸たかだかと結んだ和服姿で独唱したことであつた。この女装の出現は後に特別な影響を及ぼした。

話は余談になるが、ラーゲルは千人単位で千人の兵士が集まると、出来ないものはまずないといってよい。例えばある時、パイプを作る事が流行った。私も一つ贈られたが、それは実に見事なマドロスパイプであった。しかしそれらが道具なしで手作されるのだから驚いた。

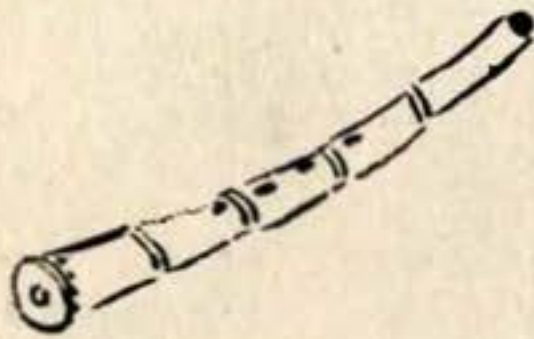
ソ連側で凡そ月に一回、ラーゲル内の一斉検査を行った。昼中のラーゲルは、炊事と医务室に若干の要員がいるだけで、大隊長以下全員が労働に出ていて留守である。誰もいないラーゲル内を、それこそ寝台をあげ、壁のすき間までさぐって嚴重な検査をする。この検査の目的は、刃物と名のつくもの、小刀はもちろん鋏、カミソリ、爪切り、フォークに至るまでを没収することであった。従ってラーゲル内に、金物は針一本ない筈であるのに立派なマドロスパイプがつくられたところに何んでもできるという驚きがある。

さて演芸会も回を重ねる度に、新しい企画で皆を驚かせた。舞台には幕ができ、背景が描かれ、小道具もできてきた。出しものも、二人の掛け合いから寸劇となり、仕舞には手

甲脚絆に三度笠で踊ったり、虚無僧姿の役者なら腰に印籠があるといった具合になってきた。また絵の具の入手にも苦勞があった。青インキ、黒インキはよいとして、赤はマキキユロであり、白は石灰である。少量のものならチョークを溶かして使用した。黒も薄いものなら石炭が役だった。

寸劇もいろいろだったが、菊地寛の「父帰る」を熱演したときは、後までの語り草になった位のものである。しかし何んといって、一般に間違いなく受けたのは、股旅もので、腰の一刀にものをいわせれば必ず拍手であった。このように演芸会の内容からして、装置や練習に手がこんでくると、自然と演芸係りといった専門の役者ができてきた。

これらの者はなるべく木工、靴工、縫工に採用したし、労働ならば一番楽である農耕班に属させた。練習で夜おそくなれば、炊事にたのんで後夜食を用意させた。こうなると演芸会はますます見

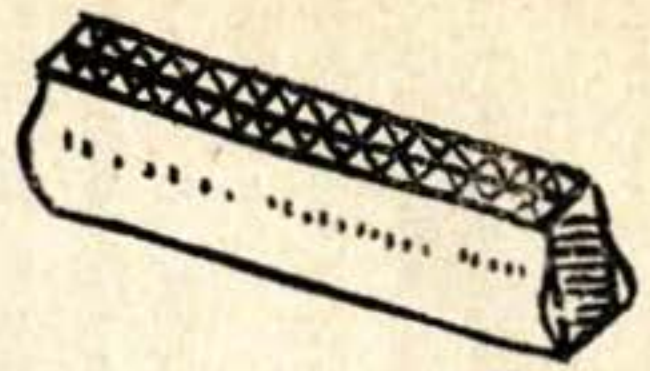


事になって、田舎芝居というところであった。演芸会はラーゲルに欠くことのできない慰安となり、人気を中心となった。

しかしその内にソ連側から警告が発せられた。一つは舞台での日本刀使用を一切禁止すること、もう一つは台本は事前検閲を必要とすることであった。歌謡曲もこれに準ずるの

で、まずはできないことになった。それまではソ連衛兵等が見物にきて、言葉が判らなくても一諸に笑い、大いに喜んでいたが、以後彼等がこなくなった代りに、通訳が必ず出張してきた。台本も革新的なもの啓蒙的なものが要求されて、従って舞台では労働者が資本社会の罪惡を説明するというものとなった。こうなると演芸会の人気はガタ落ちて、折角開演しても、幾人も見物にゆかなかった。

こうした結果はソ連側にとって不思議であったに相違ない。後の話であるが、やがて本格的洗脳工作が始まることになったのをみても判る事であった。それは別の話として、その当時も一応の洗脳工作が終り、共産主義賛成の署名も大多数が行っていたのだが、いざ演芸会をやると無宿股旅姿の登場に人気が集



まるといふ事實に、ソ連が大きな疑問を抱いたのは当然かも知れなかった。しかしわれわれの側では、その当時はまだソ連の現実に対して口がきけたものである。日本新聞と、それを受け売りするアクチブが、日本の侵略を憎み、敗戦をソ連のおかげだと祝い、ソ連軍備を讃美し、ソ連建設のために同志諸君は労働にはげめと、いかに口を極めて宣伝しても、あまりに現実と相違していた。

まあとにかく、重労働を強制されて、腹を空かせているわれわれの前で、祖国ソ連のためにといわれたり、日本を敵として日本人が貶すための劇であつては、疲れた身体を演芸会場まで運んでゆけないのも当然であつた。その結果は、あれだけ楽しみにしていた演芸会をアクチブ達に取りあげられたと同じことになった。ラーゲルの中には、うす気味悪い暗雲が重苦しくたれこめることとなった。

その時、将校団で劇をやろうと副官がいい

出して、皆これに賛成をした。われわれがこの地に來た頃の編成では将校は大隊長、副官各一、中隊長四、軍医、主計各一の合計八名にすぎなかった。それが他との交流で、いつか十数名の将校団となつていた。

劇の総指揮は副官の近藤大尉で、原作脚色演出は大溝中尉ということとで早速準備にとりかかった。大溝中尉は器用な男で、縫工場のミシンを修理したりする外、これまでの演芸会の台本をいくつも創作していた。大溝中尉の構想ができると、舞台装置は木村大尉が引き受けた。木村大尉は憲兵大尉で、戦争中には無線探知で活躍した男で、寡言実行の軍人型であつた。自分では再び日本の土を踏むことはないとは決心しているので、何事もキビキビした立派な男であつた。しかし舞台装置は一人でできるものでなく、何人かが手伝つた。

舞台左手が往来で、一段高く座敷となつていた。往来に面して水車が廻り、座敷の右手には簾筒があり、その上に仏壇がある。舞台中央に盆提灯が下つていた。

ただこれだけの舞台であつたが、これを用意するのに一月かかった。中でも水車が難物

で、毎日の労働に出掛けてゆくのに、建築関係の作業班が板ぎれと釘をこっそり持って帰つた。簾筒も何れ絵の具で描くにしても、仏壇をのせるには、どうしても箱を二つ作る必要があつた。次に盆提灯がまた大変であつた。その頃、その土地に紙がなかった。われわれは日常ブラウダを買うが、これは読むためではもちろんなくて、煙草をまくのと便所で使用するためであつた。従つて白い紙を手するのには難中の難であつた。

とにかく一同が苦心を重ねて、どうやら準備ができた。将校団が何をやるやら、好奇心があつて、いよいよその夜には久し振りに会場は超満員であつた。

拍子木の音につれて幕があいた。水車がゆるく廻つていた。動く舞台装置というので自慢のものだが、かげでは遅からず早からず手で廻している者のあることを考えれば気の毒な装置でもあつた。舞台のやや右より母親が座り、娘が母親の肩をたたいていた。さつきから尺八の木曾節が流れてくるので、二人ともそれに耳を傾けていた。母親には下士からたたきあげた宮本憲兵中尉がなり、まさに

適役であつた。娘には小野軍医中尉で、普段は強い近視の眼鏡をかけていて判らなかつたが、こうしてお白粉をぬり、紙のかつらをかぶると絶世の美人であつて、見惚れるばかりであつた。

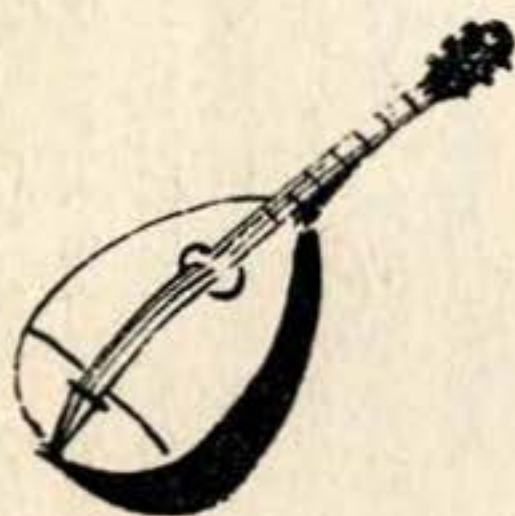
もうこれだけで見物がドツとわくので、小野中尉はセリフをいい出しそこねて、余分に母親の肩をたたく仕儀とはなつた。母娘の間で軽く会話が交されている内に、往来に村の若い男女が二組通りかかつて奥に入った。この二組の会話で、村の誰と誰は帰国したとか誰に手紙がきたとかが判るが、何れも祭りに先きを急いで行つてしまつた。

母と娘に村人たちの話を聞いて、お互に「兄さんは……」といいかけ、言葉にせずに呑み込んでしまつた。母はいつか心地良きように居睡りを初めた。娘はそれに気がついて、優しく母をねかせてやつた。そこへ村の青年が元気よく訪ねてきた。娘は急いで「静かに」との手ぶりよろしく、かねて仲のよい二人は、急いで祭りに出掛けてしまつた。

その後で、実はたぬき寝入りをして、娘を祭りに出した母親が、ゆっくり立ちあがり、

盆提灯に明りを入れた。そして舞台中央に立つたまま独りセリフをいうわけで、このところが劇の中心になつていた。

「新太郎や、お前は今頃どうしているのだろうネ。お前より後で征つた者でも帰つてきたし、音信すらないのは、この村でお前一人だヨ。お前が元気で征つたのは（指折り数えながら）もう四年二月前のことだつた。あの時心配しないでと、いつてくれた笑顔が今でも目の前にあるようです。お前の好きな浅草海苔だけは、毎日のかげ膳で欠かしたことはないけれど、喰べ物にあたりしないだらうネ。母さんはあれから毎日夜明け前に日参して、お前が丈夫で帰るように鎮守さまにお願いしています。だけど近頃は朝起きるのが辛くなつてしまつて、身体が弱つたのかネ。しかしお母さんは、お前に会う日まで、必ず丈夫でいます。お前も丈夫でいて



おくれ。病氣やけがをしないでおくれ。丈夫ならきつと会えますから、その日のために頑張っておくれ。

（間）

新太郎、どうしてお前はたよりをくれないのだろう。それとも手紙も出せない遠くにいろのかしら。きつと苦勞をしていることでしょう。手紙がこなくともお母さんは平気だよ。お前の丈夫なことを信じています。

新太郎、お前は小さな頃から優しかった。喧嘩もしないで、お母さんに孝行をしてくださいました。それだけお母さんは心配しています。どんな苦しいことがあつても、男らしくきつと生き抜いて下さいよ。お母さんも元気で前を待っています。お前も元気でいておくれ。お前は暑い所にいるのか、寒い所にいるのか判らないので、お母さんは暑い日も寒い日もお前が心配です。

お前に渡したお守りを失くさないだろうネ。お前の写真と一諸に同じお守りを飾つてあります。神さま仏さまはきつとお前を守ってくれます。妹も元気で美しい娘になりました。野良仕事に精を出しているし、お前の分

までお母さんを優しくしてくれて、ほんとに嬉しく思っています。

新太郎、早く帰ってきておくれ。早く三人一諸でご飯を喰べてみたい。お母さんは……」母親はうつむいて声をのみ、そっと涙をふいて仏壇の方に歩いて行った。

宮本中尉の目に光るものがあつた。彼はほんとに泣いて後のセリフが出なかつたらしい。それにも増して見物の方が大変であつた。初めの頃こそ、ススリ泣きがアチコチに聞えていたが、仕舞いには声まで出して泣く者がある仕末であつた。

さて舞台では、一人の青年技師が訪れてきた。この青年は母親がうしろ向きで応待している事情も判らず、近くの川にダム工事の計画があつて、自分が現地調査に派遣されたこと、当分の間自分に下宿させてもらいたいこと等、元気で説明した。この青年技師には、ラーゲルきつての美男子の太田航空中尉が扮して颯爽たるものだった。

母親がふりむくと、息子と同じ年配の好青年が立っているの、座敷に迎え、早速下宿の世話を快く承知をした。しばらくダム工事

のことで話がはずんでいる内に、娘がさっきの青年と祭りから帰ってきて、舞台は母親と若い三人とで賑やかな会話が続いた。やがて村の青年は帰り、娘と技師は右手に退場した。後は母親一人が何んとなく燥いだかたちで、座敷を片付けていると、舞台左手から老郵便局長が、腰をかがめ急ぎ足で、「大変だ、大変だ」といいながら登場した。

郵便局長はいさつもせず、座敷にさがりこみ

「大変だよ、新太郎君から電報で、帰ってくるんだとヨ」

「何、電報ですって」

と母親は一瞬顔いろを変えて、その電報を奪うように受け取ったが、よく読めなかつた。奥から声をききつけて娘が出てきて、電報を読み

「兄さんが……」

「新太郎が……」

と二人は抱き合つたまま言葉もなかった。やや落ちついて母親が電報を仏壇に供え、母娘二人して合掌した。郵便局長もそれにつられて背後から合掌した。

再び尺八の木曾節の聞える内に幕となつたとたんにせきを切つたような拍手がわいた。

このようにして将校団演ずる所の「新太郎の母親」は大成功裡に終つた。ここであわれを留めたのは、演芸会専属の者であつた。労働の面からも食事の点からも特別な待遇が与えられていながら、今まで何をしていたかという非難の声が充溢した。

そして結局、将校団の劇が、ラーゲル演芸会の最後となつてしまった。それから間もなく本格的な洗脳工作が始つた。われわれにとつて労働強化は相変らずであつたが、疲れきつて帰ってくるラーゲルの内部は、対立とスバイの巣とかわつてゆくのであつた。

同じく苦しい抑留生活であつても、同じ苦勞をし、お互に慰め合っている内は、暮すのにはりがあつたといえよう。それが何等の理由もなく、また互に利害関係もないのに、密告し、憎み、疑わなくてはならない生活こそ地獄というべきではあるまいか。密告にもノルマがあるとみえて、何から何まで密告しなければならぬとなると、する方も決して愉快なことでない筈だと思えた。

表紙の写真

大正大学講堂に安置され、若い学徒に敬愛されている阿弥陀如来像。かねて国宝に指定されたが、

施されているが、いずれも尊容を傷けるものでない。良く当初の面影を伝えていることは僥倖ともいふべきことである。

昭和二十五年に国の重要文化財に変更指定された。像高八十六糎。伝説によれば、安徳天皇が西海に崩せられたあと、近侍の者達が帝の御菩提を弔うために造ったといわれ、また天皇崩御に際しての御菩提回向に相応しい尊容のため、供養仏としてお用いになつたといわれている。

像の構成も頭部は両耳の後ろで大きく前後にはぎ合せ、首柄で胴部に戻し込み、木寄法としては最も典型的な藤原後期の木割りで造られている。

大体藤原時代特に後期の造寺造仏は、その発願者である貴族権力者の個人の福利安穩を願うことによつて行われた事が多い。従って華麗な装飾に荘厳され、優美な美しさが要求され、前代までの如く人をして畏怖せしめる力強さとは逆

に自づとその慈悲に頼らせるような姿にその主眼がおかれている。即ち藤原後期の仏像の特徴は、一

像は寄木造り漆箔、白毫と肉髻に水晶がはめられている。今では僅か顔面に金箔のあとがある。又全体に江戸時代と思われる修理が

口にいえば平明性と優美さがそれであつて、尊像の内に秘める高麗な仏性よりも表面に現れた美しさであつた。

会員だより

ていました。

◇貴誌スタッフの方々のご苦勞に感謝します。七月号会員だよりには、内容が難しすぎるとの意見には、十分耳をかたむける必要があると思います。文章中に、かなり宗乘に通曉していなければ理解できないようなものを書く人があります

AとBとの手は、静かにしているのに、鳥は落ちそうになって羽ばたきをします。Cの手では鳥は平気で、指の先きを嘴でつついた

が、できるだけ現代的なセンスで理解され得るような(単なる理解でなく、浄土教の信仰の糧となるような)意識をつけ加えることが大切ではないでしょうか。ますます

羽登場、Aは全然自信なく、形式的にあいている左手を差出したが知らぬ顔、Bは「来い来い」と半ば強制的に左手をバタつかせたがやはり寄りつかない。

◇テレビの「それは私です」で、三人の右人指ゆびに、インコを止らせ「どれが本当の飼主か当ててみなさい」というのがありました。Aはただ応揚に手を構え、Bは教師さん型、Cは本誌の愛読者

Cは最初二度ばかりゆるく、お

(東京・太田)

は安心した面持でチョンチョンと

のほつて行つた。Cは二羽の小鳥ののつた両手の指をいよいよ自分

念仏にすけささぬ

竹 中 信 常

一 インスタント念仏

インスタント流行の昨今では、何でも簡単に作ってたべることが出来るが、味の方は広告ほどではない。やはり、ひまと材料とをかけたものにはかなわない。お念仏をインスタント料理にたとえては、ちょっと申しわけないような気もするが、法然上人が出られたころの、京の町を中心とした諸々方々には、丁度、今日のデパートの食品売場のように、いろいろさまさまのインスタント念仏が陳列されていたのである。

「ひじり」と呼ばれる「町の聖人」たちが、思い思いのところ居をかまえ、大勢の人を集めて念仏の教えをひろめていた。今日になお、地名として残る「別所」というのは、これらの「ひじり」達が、本坊や本所、すなわち当時の由緒ある寺院から離脱して、ところを別にし、境を別に

してくらしていた地名である。信州には、そのものズバリで「別所」というところがある。東京の北、大宮市にも別所の地名が残っている。かつては四天王寺別所、高野山別所、比叡山別所等があり、宗祖が修行された黒谷も、当時は別所の一つであったのである。そして、これらの別所のおのおのでひろめられていたのが、さきにいったインスタント念仏だったのである。

見方によれば叡山を下った宗祖も、「ひじり」の一人であったのはむろんのこと、当時流行をきわめていたインスタント念仏に対して、新風を吹きこんだものということが出来る。

当時流行の「インスタント念仏」とは、天台大師の始められた常行三昧の念仏と法照の五会念仏とをミックスした「不断念仏」が中心で、これが更に儀礼化されて源信の二

十五三昧の念仏として大衆の中にしみとおって行つたのである。

大衆の間にしみとおるということは、どこかに、大衆にアップルするものがあつたわけで、その第一の点は、これをひろめる人々が、山門の奥深くに住む、いかめしい法衣姿の僧侶ではなく、町の人々と膝をまじえて談笑する、墨染姿の野僧であつたということ、そこには、カミシモを脱いだ、飾り気のない人間同士の親しみがあふれていた。「われはこれ烏帽子（えぼし）もきざる男なり」という宗祖の言葉は、形の上ででも真実であつたのである。

大衆にうけいれられた第二の点は、「インスタント」であつたからである。お湯をそそいで、ちょっとかきまわせば、もうそれでちゃんとたべられる即席ラーメンのように「ひじり」達のいうことをきいて、ただひたすらに「念仏」をさえすればよい。材料を集めたり、味つけをしたりといった手間がいらないというところに、大衆は魅力を感じたわけである。いつの世にあつても、世間一般の大衆は、むづかしい仏教理論や、四角張つたお経の講釈には縁遠い存在である。そのものズバリ、「はい、お待ち遠さま」でなければ、氣に入らぬものなのである。

このようにして、当時、民間の仏教信仰はいわば「念仏

ブーム」とでもいいたいような風情であつた。ところが、インスタントは結局インスタントであつた。それ以上のものではあり得ない。何となく味気なく、いわゆる「こく」といった深味がないので、どうしてもあきやすい。インスタント念仏も、ただそれだけでは、マスコミにのつた大量生産の製品と同じで、すぐにあきが来てしまふか、低俗に陥つて、仏教本来の滋味を失つてしまふ。現在、民間習俗として、農村や社会の片隅にわずかに残存する念仏儀礼がこのことを物語っている。

二 手拭をしぼる

何事によらず「すじ」を通すということは大切なことである。ことに、仏教のように、八万四千の法門といわれるほどに内容の過多なものを、頭脳の強くない大衆に、そのまま与えたら、消化不良をおこして下痢するにきまつている。念仏がいいからといっても、やたらにこれをすすめては、結果は同じである。いくらブームにのつたからといって、その内容を吟味せずにやたらに押しつけたのではダメである。念仏々々といつてもいささかひろうござんすで、少しばかり学問のほどを示めそうならば、華嚴宗の澄観は、念仏門として五つを教えている。すなわち

称名往生念仏門 観像滅罪念仏門 摂境唯心念仏門 心

境無礙念仏門 緣起円通念仏門である。また恵心僧都は

無相念仏 有相念仏 定心念仏 散心念仏をあげ、宗祖自身も

摩訶止観念仏 往生要集念仏 善導念仏

の三つを区別されているのであって、これらの念仏のなか、どれをすすめ、どれを与えるかについて深く思いを致されたところに、宗祖の念仏が、当時流行のインスタント念仏とは本質的に異なるゆえんがあるのである。いわば、宗祖の念仏には、一本「すじ」がおっていたのである。逆にいうならば、世にいわゆる念仏を、一本にしぼって、これに筋金をとおすためにこそ、それまでの祖師達の誰一人としていままで試みられなかった「教をえらぶにあらず、機を計うなり」の立場、すなわち、人間の側に立ち、その能力の限界内での「選択」を行われたのである。年期を入れた板前が、自慢の腕をふるって、吟味に吟味を重ねて作り上げた料理なのである。即席ラーメンや、即席カレーなどくらべものにはならぬのは当り前である。

「すじ」とおすということは、「一本にすること」である。色々雑多にあるものを整理して、スカッとしたものにするのである。それには、まづ第一に、余分なもの、不純なものをふりすてねばならない。ここに、第一章段に

つづいて、第二回目「選捨」が行われるゆえんである。選択集第二章段の章題にはっきりと書かれている。

「善導和尚正雑二行をたてて、しかも雑行をすてて、正行に帰するの文」

雑行とは当時行われていた種々雑多な行法をいうので、すべてそれは、宗祖のとらえられた「人間」の可能性の限界外のものであり、いわば名目のみ羅列されても、これに伴う実践可能の裏づけのむづかしいもののみである。絵に描いたポタ餅か、さもなければデパートの食堂の入口に飾ってある見本料理みたいなものである。いくら沢山ならべであっても、お腹具合とフトコロ勘定で、たべられるのは一品か二品である。修法の数も多いばかりが能ではない。そこで、宗祖は雑行を捨てられたのである。少しのタメライもなしにズバリと切りすてた。第二章段の結文にいわく「私にいわく、この文をみるに、いよいよすべからく雑をすてて、専を修すべし。あに百部百生の専修正行をすて、かたく千中無一の、雑修雑行を執せんや。行者よくこれを思量せよ」

（善導大師の観経疏をみると、ますます雑行をすてて、専修念仏を修すべきことが大切である。専修念仏を行ずれば、百人が百人すべて往生出来るのに、どうして、千人の

うち一人も往生の出来ぬような雑修雑行に執着してよいものだろうか。よく考えてみるべきである。

雑なものはいらぬ。純粹無垢のもの一本で行こう。こう仰せられているのである。一本の手拭をしぼると、含まれている水が滴（しづく）となっておちる。それも、だぶだぶのゆるしぼりでなく、宗祖がその宗教的生命をかけて、渾身の力をこめてしぼられた、かたしぼりの手拭である。サッパリとした肌ざわりがするのは当然である。この上、いくらしぼっても、一滴の水もしたたらぬ、一向専修の手拭（念仏）である。されば、また、こうも言っておいでになる。「もし念仏のほかにもたまた余行を加えれば、即ち一向にあらず」

三 筋金入り

一生懸命になって作り上げたものを、他人から

「何だ、こんな雑（ざつ）なものを作った」といわれれば、たいていの人間は腹を立てるであろう。それと同じで宗祖の時代、これこそ本当の仏道修行の道であると思ひこんで、一生懸命に色々のお経を読んだり、諸仏を思念観察したり、礼拝したり、讃歎供養したりしていた人々が、「お前達のやっていることは、みんな『雑』なことだ」といわれたのだから、おこり出したのもむりはない。

「雑行」ということをいい出したのは、宗祖が全心全霊これに傾倒した善導大師であつた。善導はその著観經疏第四散善義のところでこれを説いているが、「この正助二行を除いて已外の自余の諸善をば悉く雑行となづく」といつて、「捨てよ」とはどこにもいつておらず、また、雑行の内容を具体的に指摘してはいない。従つて、その解釈には可成りの「はば」があるので、さのみではなかつたが、宗祖はこれはハッキリと示して、弥陀信仰以外のものをみな雑行として、「捨ててしまえ」と宣言されたのである。いわゆる「ふくみ」をすてて、そのものズバリで行つたのである。こちら側からみれば、胸のすくような啖呵（たんか）だが、あちら側からいわせれば、とんでもない悪口としかうけとれない。なかでも怒つたのは、鎌倉時代初期の学僧といわれた梅尾（とがのを）の明恵であり、日蓮もこれにつづいて、口をきわめて非難している。叡山の衆徒も「くだんのやから（念仏の人々）、鎮国の諸宗を謗り、呼んで雑行といい、放逸の一法を立つ」とふんがいつている。

こういった非難は、ただにこのことに関してだけでなく、選択集全体、いや法然教学の全体系に対しても、あくことなく、くりかえし加えられたことは、歴史が物語つているとおりでである。しかし、これをひっくりかえしていう

ならば、そのように非難されるだけ、それは人々の関心のまどになったのであり、関心のまどになったということとは、非難する者の側の足もとに、ふかく切り込んだということになる。誰も、自分に関係のないことにはムキにならぬものである。ムキになるのは、自分の弱点をはっきりとえぐり出されたからである。

宗祖は、ただ単に、イヤがらせにこんなことをいったのではない。「捨てる」べき当然の理由があるからこそ「捨てよ」といわれたのである。このことを五つの項目にまとめて説明されている。すなわち

一 専修念仏の行者は、常に弥陀の名号を称え、これを礼拝し、念じている。従って弥陀仏と行者とはいつも離れることなく、親しみ合っている。雑行を修する者は、弥陀以外の諸仏についているので、弥陀仏と疎遠である。

二 従って、弥陀仏を称念するものは弥陀と隣り合せだが、そうでないものは遠く離れている。

三 専修念仏する者は常に弥陀を憶念してたえ間がないが、雑行のものは時々しか弥陀を憶念しない。

四 弥陀を念ずる者は、専修念仏自体に往生の目的意志が含まれているから、わざわざ廻向する必要はない。雑行の者は、弥陀の浄土に往生するには、ことさらその方向に心

を志向させねばならぬから、廻向の必要があるのである。五 専修の行者は専ら往生浄土の行をいとなむが故に、その行為は純一である。雑行を修するものは、その行が不純である。

要するに、弥陀一仏に全心全霊を投げかけ行くところに、一本になり切った姿があるのである。しかも、その中に、一本の筋金がおっているのである。正行の中の「正定業」という筋金である。

「正業とは、上の五種（読誦・觀察・礼拝・称名・讚歎供養の五正行）の中の第四の称名をもて正定の業とす。すなわち、文に、一心にもっぱら弥陀の名号を念じて、行住坐臥、時節の久近（くごん）を問わず、念々にすてざるもの、これを正定の業となす。かの仏の願に順ずるが故にといえるこれなり」

一心専念弥陀名号。これだけでよろしい。雑行ばかりではない、称名以外の他の四正行もいらない。お念仏だけで立派に往生出来るのだ。他の四つの正行は助業であって、念仏生活をいとなむ機縁となるだけのもので、決定的なものではない。念仏一本、これでよし。和語灯録という書物の中に、述べられている。「本願の念仏には、ひとりだちをさせて助（すけ）をささぬ也」

（文学博士）

あとがき

◇惠谷隆戒先生は仏教大学長に御就任になりました。先般学会に御出席のため上京されましたので、祝賀の小宴を催しました。しかしそれに御出席の先生方は、増上寺法主椎尾弁匡、光明寺法主大野法道両先生を初め、学監佐藤密雄、淑徳学園理事長大河内隆弘、芝学園長松本徳明、淑徳学園長服部英淳の各先生、宗務所から戸松学瑛、福田稔界両部長、稲岡課長の各氏特に阿川貫達、塚本善隆両先生の顔がみられ、また正大からは佐藤賢順先生を初め各先生が出席されなごやかな一席の集いでした。

◇梵本における第十八願文について故河口先生の一文は、以前から問題になっていたものですが、たまたま一読者からの質問がありましたので、特に小沢勇賀先生にお願いして回答していただきました

今までこの問題は黙殺されたかたちでしたのを、この回答によって明かにされたことは誠に喜ばしいことです。小沢先生にはお忙しい所をご迷惑をおかけしました。

◇石上善応先生は梵文学専攻の新進学徒ですが、名月にちなんで、珍しい梵本の説話を紹介して下さいました。日本にある伝説は、実は世界中に同じものがあるので驚かされます。近頃は世界が狭くなった等いわれますが、古い時代から世界は案外狭かったのだと気がつきます。

◇中野隆元先生から久し振りに布教のお話をいただきました。先生は相変らず御元気で、布教の第一線に御活躍中です。

◇同じく彼岸会に因んで平林宥高先生のお話をいただきました。平林先生は豊山派宗務総長で、正大理事長でもあります。近代的宗務所を新築されて、一躍有名になりましたが、布教の面でも第一線の闘士です。

◇竹中信常先生の聖典講義第三回は、難しいところに差ししかった観があります。宗相が当時にあつて人間のとらえ方がどうあつたかの問題から説明されています。

◇一瀬直行氏から久し振りに玉稿をいただきました。厚く御礼申し上げます。

◇吉野翠幹氏の第二話は、面白そうな演芸会の裏にジットこらえた苦しさがあります。

◇本会の事務所を移して日が浅く事務上で会員各位にご迷惑をおかけしています。もうしばらくの許しをお願いします。

◇投書は大いに歓迎しますが、是非住所氏名はご明記下さい。ただし誌上のとく名はご自由です。投書の多くはお叱りですが、支部等のご近況をお待ちしています。せいせいお寄せ下さい。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 九月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十六年八月廿五日 印刷

昭和三十六年九月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬秀雄

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京三三二局五九四四番

振替東京八二一八七番

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

新刊 浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料二〇〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料二〇円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町二ノ八

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和三十六年八月二十五日印刷 昭和三十六年九月一日発行

浄土

第二十七卷

第八号

定価金五拾円 (送料六円)

日本一の生産・設備

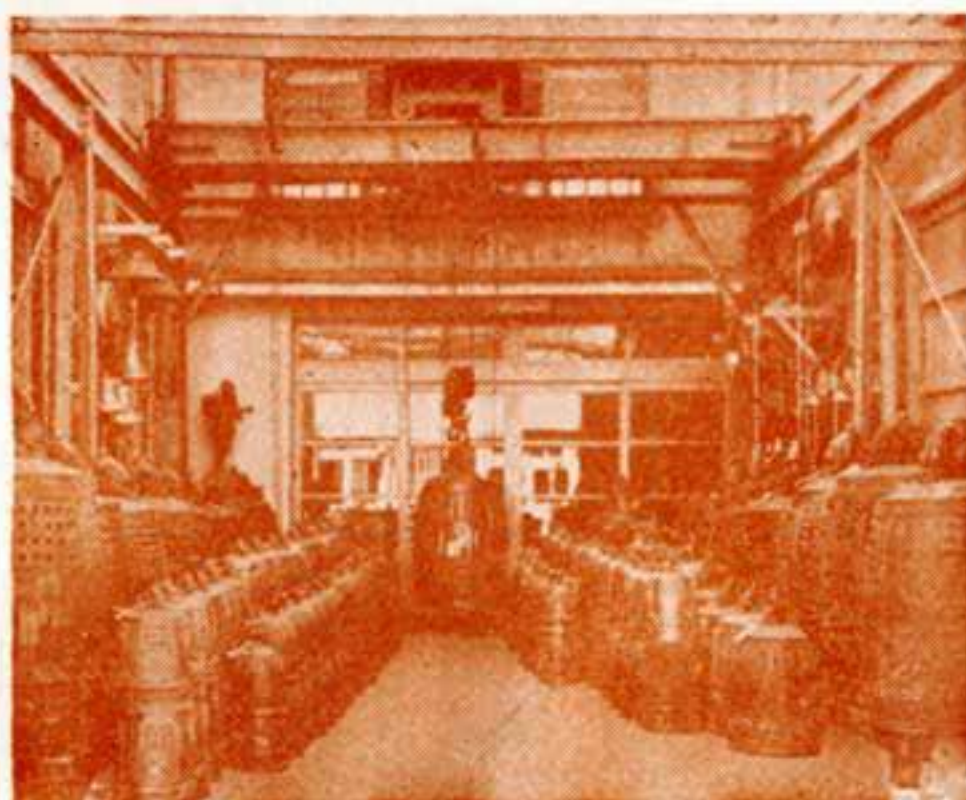
梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音 響理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展 参事 香取正彦先生
芸術院賞受賞



日本最初の黄綬褒賞
(昭和三十年四月廿七日)

鑄物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分 (梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 (34) 8847番 本社工場 高岡市横田